

公益社団法人 日本記者クラブ 〒100-0011 東京都千代田区内幸町2-2-1 日本プレスセンタービル TEL.03-3503-2722 <http://www.inpc.or.jp/>



撮影：浅川 広則（共同通信社写真部）

(中井良則)

2月はフル回転 会見27回、ダブル・トリプルも

「四月は残酷な月」(吉田健一訳)
T・S・エリオットは『荒地』をそう書き出した。英国の名詩に比べるほどのことではないが、日本記者クラブにとって「2月は多忙な月」になった。

土日休日を除くワーキングデー20日間で、記者会見は計27回。ダブルヘッダーが8日、トリプルも1日あった。東日本大震災5年前に被災地への取材団を2組、送った。フル回転の月だった。

数の多さを自慢したいわけではない。それぞれ中身の詰まった会見だった。会見動画をチェックする時間がない方は取材した記者が書く「会見リポート」をご覧ください。

クラブゲスト 3・5
菊地啓夫／吉田俊通・櫻井重夫／品川萬里／内堀雅雄／中筋純／照井翠／大崎敬子／北岡伸一／志賀俊之／山海嘉之／隈研吾／大矢根聡／武田洋子／古矢旬／小笠原欣幸／藤田孝典／宮本悟／川瀬光義／アビール・オーデ／杉本和行／ジュリー・ビショップ／琴奨菊／ウェンディ・シャーマン／モハメド・エルメンシャウィ／工藤律子／ウィリアム・レイシー・スウィング／ローレンス・トゥビアナ

会見リポート
内堀雅雄・福島県知事／照井翠・俳人 6
隈研吾・建築家／ビショップ・豪外相 7
琴奨菊・大関／トゥビアナ・仏気候変動交渉担当大使(COP21特別代表) 8
中筋純・写真家 9

岩手・宮城取材団報告 10・11
福島・宮城取材団報告 12・13

特集「3・11から5年」 14・20
5年生記者は今

この「やましき」がなくなる日まで
河北新報社 高橋公彦
「あなたで良かった」を支えに
岩手日報社 佐々木理紗
入社時の気後はもうない
福島民報社 菅野 聖
「未経験の壁」現場取材で超えたい
福島民友新聞社 谷口隆治
ちりりとぞく「非日常」を忘れない
福島中央テレビ 佐藤昭徳
報道カメラマンとしての原体験
共同通信社 中島 悠

先輩記者と東日本大震災
記者から町役場職員に転身し復興支援
朝日新聞出身 但木 汎

記者ゼミ 次世代ジャーナリズムの現場 21
杉田敦・法政大教授／武田徹・恵泉女学園大教授

ワーキングプレス
マイナス金利導入 22
共同通信社 早田栄介
北朝鮮ミサイル発射 23
テレビ朝日 山本志門

リレーエッセー 24
本田技研工業の創業者 本田宗一郎さん 岡田 実

寄贈書／マイBOOKマイPR 25

駐在記者には忘れられない国務省高官だ。民間人となってオンレコで話せる立場で来日した。

北朝鮮やイランをめぐる発言がニュースになったが、日口首脳会談を語る日本に対し「クリミア半島はロシアの違法な併合だ。日本はG7議長国であり連帯を期待する」と述べたのが気になった。安倍外交にここまではつきり異論を唱えたのは意外だった。安倍政権から見れば日口関係の進展でも、米国にすれば足並みの乱れ、というわけだ。

案の定、というべきか、翌週、オバマ大統領が安倍首相に訪口計画への懸念を伝えたという記事が出た。

常任理事国に談合させるな
北岡元国連次席大使

JICA理事長に転身した北岡伸一さんは「国連と日本人」シリーズ

(2月24日)で来てもらった。前回は昨年8月の戦後70年安倍首相談話がテーマだった。立場が違うからか面白い話が出る。

ニューヨークの国連次席大使(2004-06年)の体験が強く残っているようだ。今年注目される事務総長選びでは「事務総長は地位のインフレが進み、各国の閣僚・総理経験者でない」と難しい。これまで日本では閣僚経験者には(候補者は)一人もいなかったとずばり。それでも「日本は米国と組んで適任者を探せばいい」と提案し「常任理事国5カ国(P5)の密室の権力を取り除くべきだ」と言う。「P5の談合」という言葉も使うほど、安保理の現実には反発があるらしい。

日本人の国連職員は少ない。「日本は豊かで平和で快適な国ですからね。大学でも外へ打って出る気持ち」が乏しくなった」と嘆いた。

国連についての談話や寄稿を北岡さんに求めるメディアが増えるかもしれない。

*

冒頭のエリオットの詩は「鈍った根を春雨で生き返らせる」と続く。2月は忙しかったが、鈍った感覚が生き返った日もあった。

(専務理事 中井良則)

照井 翠 俳人



2年半前は、「春の星こんなに人が死んだのか」の句をゲストブックに揮毫した。今回は、「寄するもの容るるが湾よ春の雪」と書き入れた。「海は悪くない。ただ寄せるものを受け入れる」。震災から5年近くたち、こういう気持ちになれる、と静かに語った。

■2・26(金) シリーズ企画「3.11から5年」⑩／司会：瀬口晴義委員／出席：29人

大崎 敬子 国連本部経済社会局統計部次長



国連職員4万人のうち日本人は約770人。ニューヨーク本部で働く177人の7割近くが女性という。「国連は女性として仕事しやすい。結婚したから、子どもが生まれるからやめる、という考えはない」。現職の統計部でSDG（持続可能な開発目標）に取り組む。

■2・10(水) シリーズ企画「国連と日本人」②／司会：倉重篤郎委員／出席：32人

北岡 伸一 国際協力機構（JICA）理事長



国連次席大使だった05年、日本の安保理常任理事国入りを仕掛けた。「国連総会の採決を主張したが東京がノーだった」「拒否権を持つのは不可能」「首相が米大統領と話すのが不可欠」と断言。厳しい口調で「日本人は知的格闘技をしないし議論べた」といらだちも。

■2・24(水) シリーズ企画「国連と日本人」③／司会：杉田弘毅委員／出席：54人

志賀 俊之 産業革新機構会長兼CEO



「日本企業は細かな違いを競う過当競争ばかり。企業の再編統合を進めなければ小粒のまま世界から取り残される」と繰り返した。「不採算部門の切り離しは健康体のうちにやるべき」とも。質疑ではシャープ買収問題の関連質問が相次いだ。

■2・19(金) シリーズ企画「チェンジ・メーカーズに聞く」①／司会：安井孝之委員／出席：110人

山海 嘉之 サイバーデザイン社長



世界初のサイボーグ型ロボットスーツ「HAL」を会場で実際に動かすと「おーっ」と驚きが広がった。「専門外を理由にしていたら物事は始まらないんです」「重介護ゼロの社会を作りたい」。小学3年で科学者を志した少年がチェンジを仕掛け、実現へ突き進む。

■2・22(月) シリーズ企画「チェンジ・メーカーズに聞く」②／司会：川上高志委員／出席：65人

菊地 啓夫 宮城県岩沼市長



岩沼市は、被災地で復興が一番順調に進んでいるといわれている。「早期復興の最大要因は、集落単位の避難所移住によりコミュニティが維持されたこと」と分析した。南海トラフ地震への教訓は、との質問には「津波が来たら逃げるのが一番」と強調した。

■2・4(木) シリーズ企画「3.11から5年」⑤／司会：瀬口晴義委員／出席：30人

吉田 俊通 公益財団法人オイスカ啓発普及部副部長（右）
櫻井 重夫 名取市海岸林再生の会副会長（左）



宮城県名取市での海岸林再生プロジェクトの紹介。10年間でクロマツ50万本を植える計画で、すでに13万本が育っているという。この事業は被災農家を雇用、農業復活の貴重な収入にもなっている。

■2・10(水) シリーズ企画「3.11から5年」⑥／司会：石川洋企画担当部長／出席：21人

品川 万里 福島県郡山市長



「現場感覚を伝えたい」と青い作業着姿で登壇した。除染作業の結果、年間被ばく量は基準値を大幅に下回っていると詳細なデータを示して説明。震災直後、子どもたちの安全のため懸命に放射線量を測定した高校教師の例を紹介する際、声を詰まらせて涙ぐんだ。

■2・17(水) シリーズ企画「3.11から5年」⑦／司会：倉重篤郎委員／出席：56人

内堀 雅雄 福島県知事



「福島復興は光と影が混ざり合った状態」と切り出した。観光や農業などの復旧とロボット産業などの新しい力の両方で「福島プライド」を取り戻したいと強調。風評被害には「特効薬はない。時間をかけ誠実に事実を発信していくしかない」と語った。

■2・22(月) シリーズ企画「3.11から5年」⑧／司会：瀬口晴義委員／出席：102人

中筋 純 写真家



チェルノブイリと福島。原発事故の現地に通り撮影を重ねてきた。「見えない放射能災害をどうすれば見えるようにできるか」。人が消えた商店街。散乱した食品を動物が食いあさったスーパー。知らない現実がまだこんなにあると息をのむ。「写真に語らせてい

■2・22(月) シリーズ企画「3.11から5年」⑨／司会：中井良則専務理事／出席：26人

ふじた たかのり
藤田 孝典 NPO法人ほっとプラス代表理事



近著『下流老人』（朝日新書）は20万部を突破。豊富な現場体験を背景に「現役時代は『中流』でも病気や家族問題で、あっという間に『下流』になるのが現実。一度転落すると自力で解決は困難」と強調。「非正規の多い若年層の老後はもっと深刻」と警告した。

■ 2・9(火) シリーズ企画「現代日本の貧困」⑥／司会：軽部謙介委員／出席：55人

みやもと さとる
宮本 悟 聖学院大学特任教授



分からないことばかりの北朝鮮。原爆と水爆の違いに始まり、ミサイルの推進剤を見分ける方法まで具体論、技術論に徹した。「ミサイルは米国にとって問題となる。4キロトンの核兵器は漁船に積めるので、日本の小さな湾に突っ込まれたら…」と怖い警告も。

■ 2・9(火) 研究会「北朝鮮の核実験と軍事力」／司会：山本勇二委員／出席：91人

かわせ みつよし
川瀬 光義 京都府立大学教授



財政的観点から沖縄問題を分析した。「交付金による公共施設整備で基地がもたらす苦しみは解消しない」「経済施設ではない基地の経済効果を論じること自体がおかしい」「辺野古問題では再編交付金支給が政治的意見によって差別されている」

■ 2・12(金) シリーズ企画「沖縄から考える」⑩／司会：軽部謙介委員／出席：40人

アビール・オーデ パレスチナ国家経済相



日本主導のパレスチナ援助構想「平和と繁栄の回廊」の中核である西岸エリコでの農産加工団地が2月から本格操業した。「イスラエルの占領のせいで肥沃なこの地方の開発が遅れていた。日本の協力もあり、ようやくスタートできた」と力説した。

■ 2・15(月) 記者会見／司会：土生修一事務局長／通訳：宇尾真理子／出席：25人

すぎもと かずゆき
杉本 和行 公正取引委員会委員長



欧米は競争政策をさらに推し進めている。「『和を以て…』の日本人だが、競争に適応しなければ未来はない。ガチンコで競争しなければ」。にじみ出るのは日本の競争力への危機感。「産業のあらゆるところでガラパゴス化が進んでいる気がする」

■ 2・15(月) 記者会見／司会：安井孝之委員／出席：55人

くま けんご
隈 研吾 建築家



2020東京五輪の新国立競技場コンペに勝った。語り続けたのは「木を使う」設計哲学。「下から見上げる垂木と軒に日本建築の美しさがある」「私の世代から建築の考え方が変わった」。予算、工期、法規制など制約の下でも自分のデザインを形にする意地を見た。

■ 2・1(月) 記者会見／司会：瀬口晴義委員／出席：70人／会見詳録

おおや ね さとし
大矢根 聡 同志社大学教授



経済分野のTPPを政治や外交の視点から分析した。「日本の経済外交史上、官邸主導による統一的交渉団はTPPが初めて」「牛肉は豪州とまず合意して米国の譲歩を狙った。米議会の反発は招いたが、米国に対し駆け引きを仕掛けた珍しい事例となった」

■ 2・2(火) 研究会「TPP」⑤／司会：軽部謙介委員／出席：57人

たけだ ようこ
武田 洋子 三菱総合研究所政策・経済研究センター副センター長



日本経済再生には「人的資本」「イノベーション」「持続可能性」の3点が重要としたうえで「経営者がデフレマインドから抜け出していない」と指摘。日銀出身のエコノミスト。現在の日銀の政策には「異例であり10年後でないと評価できない」と慎重だった。

■ 2・5(金)「経済見通し」⑥／司会：実哲也委員／出席：85人

ふるや じゅん
古矢 旬 北海商科大学教授



ポピュリズム。米大統領選のキーワードを政治史に位置づけた。憲法は「We the people」と始まる。「分極化するビープルを政治のことばでまとめる努力が続く」。クルーズと赤狩りのマッカーシーを比べ、サンダースはベトナム反戦のマクガバンに近いと分析した。

■ 2・5(金) 研究会「変わるアメリカ・変わらないアメリカ 大統領選」①／司会：杉田弘毅委員／出席：110人／会見詳録

おがさわら よしゆき
小笠原 欣幸 東京外国語大学准教授



台湾選挙の専門家で、今回の総統選、立法委員選も予測的中させた。「国民党の歴史的役割は終わり、今後は中国ナショナリズム回帰を唱える中小政党になる」と断言、「今後は『台湾アイデンティティー』を基盤とする政党同士が総統を争う」と予測した。

■ 2・8(月) 研究会「台湾総統選を読み解く」／司会：坂東賢治委員／出席：66人

ウィリアム・レイシー・スウィング

国連移住機関 (IOM) 事務局長



欧州への移民の嵐に最前線に対応する国際機関を率いる。「国境を越えた移住と国内移動を合わせて10億人。世界の7人に1人が移動している」。大規模移動は「避けられないし、必要であり、しかも望ましい」と移民の役割を認めた仕組み作りを呼び掛けた。

■ 2・25 (木) 記者会見／司会：秦野るり子委員／通訳：西村好美／出席：50人

ローレンス・トゥビアナ

仏気候変動交渉担当大使 (COP21特別代表)



特別代表就任前は、米コロンビア大客員教授を務めた環境政策の専門家。パリ協定をまとめた功労者として知られる。協定は早ければ2018年中にも発効すると予測。気候変動の現実と直面し、各国政府と企業が一体化して取り組む姿勢が背景にあるとした。

■ 2・26 (金) 記者会見／司会：ヴィーラント・ワーグナー委員／通訳：森岡幹子／出席：29人

ジュリー・ビショップ

オーストラリア外相



クラブには3回目。日中のどちらが重要か、と問われて「どちらも戦略的パートナーシップの相手。2国とも重要で優劣はない」。その一方で「中国は世界の安定に貢献すべきだ。米国のリバランス戦略は豪日に安心感を与えてくれた」。会見後、中国に向かった。

■ 2・16 (火) 記者会見／司会：坂東賢治委員／通訳：池田薫、西村好美／出席：76人

琴奨菊

大関



「稽古は心を鍛える。練習は技術を鍛える」優勝したら、見える「風景」が変わった。もっと見たい」。記事になるフレーズが次々飛び出した。名調子の間に、先代親方、新妻、トレーナー、弟弟子、ファンへの感謝の言葉もちりばめられた。

■ 2・16 (火) 記者会見／司会：原田正隆委員／出席：97人

ウェンディ・シャーマン

前アメリカ国務次官



クリントン、オバマの民主党政権で国務省のキーパーソンだった。民間人として発言の自由を得たが、北朝鮮問題には「米日韓中で静かな協議を進め圧力を強める」と「静か」を強調。日露接近の安倍外交に「団結を期待する」と繰り返したのは苦言に聞こえた。

■ 2・17 (水) 記者会見／司会：杉田弘毅委員／通訳：池田薫／出席：65人

モハメド・エルメンシャウイ

アラビ・テレビジョン・ネットワーク・ワシントン支局長



米国を拠点に中東情勢を中心に取材を続けている。現在はカタル系テレビ局のワシントン支局長。「民主化をめざした『アラブの春』は失敗し、ISの撲滅も容易ではない」と指摘、今後の「時限爆弾」としてヨルダンとレバノンの国名を挙げた。

■ 2・18 (木) 囲む会／司会：土生修一事務局長／通訳：西村好美／出席：30人

工藤 律子

ジャーナリスト



不況に苦しむスペインで「雇われて生きる」に縛られない人々取材した。主婦を例に挙げ「家事が評価され対価を得られれば、それはもう1つの経済、もう1つの生き方になる」。5年前のデモは新政党旋風に結実した。「オカネはなくても豊かになれる」

■ 2・24 (水) 著者と語る『ルボ 雇用なしで生きる』／司会：中井良則専務理事／出席：31人

会見余話

●販売部数と訪問客の関係

ベストセラー『下流老人』の著者、藤田孝典さんが会見で明らかにした「販売部数と影響力」の体験談が興味深かった。

「5万部売れたら厚生労働省の役人が話を聞きに来た。10万部売れたら、今度は財務省の役人が『予算化の参考に』と会いに来た。その後、低所得年金受給者への『3万円支給』政策が発表された。15万部売れたら、自民党の国会議員が何人も会いに来た。一億総活躍政策での高齢者対策の参考にしたとのことだった」

「50万部売れたらオバマ大統領が会いに来る」と冗談をとばしたが、身につまされる内容のせい

●小さな笑いが起きただけだった。プレスから「逃げない姿勢」

産業革新機構会長の志賀俊之さんの会見は、シャープ再建問題で台湾の鴻海と産業革新機構の「一騎打ち」が最終局面を迎えた時期にあたり、一線の経済記者が会見場に殺到した。表に出たくない状況であり、さらに同機構の役割紹介が会見承諾の理由だったので、ドタキャンも覚悟したが、志賀さんは「いやあ、こんなタイミングになるとはね」と苦笑しながら控室に現れた。

会見では「機構について質問してほしい」と要望したが、シャープ関連の質問にも丁寧な答え、終了後も担当記者とのぶら下がり取材に応じた。プレスに対し「逃げない姿勢」が印象に残った。(事務局 土生)

3.11から5年

うちばり まさお
内堀 雅雄 福島県知事

「2つの風」の中で トップセールス繰り広げる

「光と影が混ざり合った状態」。内堀氏は福島県の現状をこう総括した。「ため息をつきたくなることも正直ある」と言う。震災当時は副知事として、おとしからは知事として福島県の復興のため奔走している人の言葉として重く受け止めた。



内堀氏は積極的なトップセールスを繰り広げている。去年はミラノ万博、今年1月にはスイスのダボス会議で福島県の復興をアピールした。県民の評価も高く、知事支持率は70%を超える。

内堀氏が指摘する、福島が抱える課題の1つが「2つの風」。風評と風化だ。海外では今も福島県の全域が避難区域になっているとの誤解すらある、と嘆く。会見の2日前には、韓国で予定されていた復興イベント

が突然中止となったばかりだ。誤解や無関心を乗り越え、正確な情報を伝えることはまことに難しい。

例えば福島県産のコメは全袋検査をした上で出荷されるが、検査された昨年産のコメ計1030万袋のうち基準値以上の放射性物質が検出されたのは何袋だったか、知っている人はどのくらいいるだろうか？ 答えはゼロである。われわれの脳裏に焼き付けられたイメージが、事実の正確な理解に及ぼす影響は実に大きい。

内堀氏が風評被害について、「特効薬はない。福島県の『光と影』の両方を地道に伝えていく」と語るのを聞いて、何とも切なかった。あらためて、福島第一原発事故の罪の重さに憤らずにはいられなかった。

さて震災から5年の今年、福島県はもっと「光」の部分のアピールしてみたらどうだろうかと思う。毎年、私は福島を訪ねているが福島は良い所だ。内堀氏が売り込んでいた通り、いい湯に浸かってうまい酒をいただくのも良し。4月からは福島の観光キャンペーンが始まるという。多くの人々が普通に福島を訪れるようになるれば風評被害など恐れるに足らず。福島には胸を張ってアピールするに値する多くの宝があるのだから。

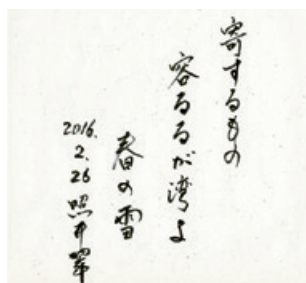
フジテレビ報道番組部長 清水 正樹

てるい みどり
照井 翠 俳人

三月を喪ひつづく砂時計

東日本大震災を釜石で経験した俳人、照井翠さんは2013年、3・11を詠んだ句集「龍宮」で俳句四季大賞などを受賞した。その中にこんな句があった。

〈春の星こんなに人が死んだのか〉
大津波の後、降り続いた雪がやみ、



「夜の闇を星が埋め尽くした」。無数の「御霊が昇天した」と感じ、合掌して、詠んだ。

壮絶な大量死を前にした、鎮魂の姿勢がうかがわれる。残酷だが、美しい句だと思う。

今回、「龍宮」の後に詠んだ句から98句を自ら選んで、震災5年を期したミニ句集を作った。こんな句がある。

〈三月を喪ひつづく砂時計〉

詠んだ心境はこうだと言う。「この震災は終わりが見えもしない。ど

こまでも続く」砂を永遠に失い続けていく。そんなイメージ」

震災から3年半たった頃、照井さんは「なかなか進まない復興にいら立っていた」と振り返る。その時期の句は確かにいら立ちがにじむ。

〈鯛や山の頂まで墓場〉

〈万緑の底で三年死んでゐる〉

今、「3月に対する気持ちが変わってしまった。3月と聞くと怖いなと思う」と語る。春の喜びは失われた。その怖さはこんな句にもあらわれている。

〈死なば泥三月十日十一日〉

「三月十日」は敗戦の年、1945年の米軍による東京大空襲の日を指す。俳人にとって、東日本大震災の被害は太平洋戦争の戦禍と重なる。「人は死んでしまえば泥につかる」

俳人の心はこの5年、「鎮魂・慰霊」から「戸惑い・いら立ち」、そして日本という国に対する「危惧・憂い」へと移ろってきているようだ。

大津波となって人を襲った海について、「ようやく違う見方ができるようになった。悟りというか、今の気持ちは、海は悪くない、ということ」と話した。

読売新聞社編集委員 鶴原 徹也

隈
研
吾
建築家

デザイン類似の指摘に反論



2020年東京五輪・パリオリンピックのメイン会場となる国立競技場をデザインした、建築家の隈氏が会見し、デザインのコンセプトをあらためて説明し、ザハ・ハデイド氏の旧デザイン案との類似点が指摘されることに對して反論した。

隈氏は、競技場の鳥瞰図や内部、断面図などをプロジェクトに映しながら▽神宮外苑の森との調和を考え、建物の高さを49メートルとなるべく低くしたこと▽軒庇や屋根などに木をふんだんに使い、木の温かみを感じられる工夫をしたこと▽最上階の外周に約850メートルの回廊を設け、散策を楽しめるようにしたこと——など競技場の概要を説明した。

質疑応答では、白紙撤回された旧案をデザインした英国の建築家ザハ・ハデイド氏の「競技場の設計や観客席の配置が似ている」という指

摘に対する見解を問われた。隈氏は「建物の外観は対照的だと思う」と反論。客席が旧案と同じ3層構造であることについては、旧コンペの最終審査に残った11作品のうち7作品が採用していることを指摘した上で「避難やユニバーサルデザインの問題を考えたり、法令を順守したりすると、同じような形に落ち着く」との見解を示した。座席のレイアウトや柱の位置などが似ている点についても、同様の見解から「著作権の専門家に聞いても問題ないと言われている」と反論した。

19年のラグビーW杯の決勝戦に間に合うような工期短縮の可能性については、「かなり精密に工程表が作られており、2カ月の短縮は非常に厳しいと思う」と回答した。

会見では、法隆寺の五重塔を例に出すなど、平易な表現を心がけているのが印象的だった。また、1月15日には日本外国特派員協会でも会見を行うなど、国内外に向けて丁寧に説明しようとする姿勢もうかがえた。

今後、聖火台の位置など、関係者と詰めて詳細な設計が行われていく。何かと注目される建築物だけに、引き続き丁寧な対応が求められるだろう。

読売新聞東京本社文化部 森田 睦

ジュリー・ビショップ
オーストラリア外相バランス意識か
「日中どちらも重要」

当クラブでの会見は自由党政権発足直後の13年10月、東京で日豪外務・防衛閣僚協議（2プラス2）が開かれた14年6月に続き、3回目だ。昨年9月の与党党首選でターンブル政権が誕生した後も外相ポストを維持した。副党首も務める実力者らしく、会見でも隙のない受け答えが目立った。



冒頭のスピーチではまず、オバマ米政権のアジアへのリバランス政策を評価し、米国のプレゼンスの重要性を強調してから、対中政策に言及した。中国の台頭が地域の繁栄につながっていると歓迎する一方で、力に見合った貢献を求めるなど、いろいろなバランスを意識したような発言が続いた。

訪日後、中国訪問を控えていたた

め、あえて「オーストラリアにとって日本と中国のどちらが重要か」といじわるな質問をぶつけてみたが、「どちらも重要で優劣はつけていない」「北東アジアの各国と良好な関係を築きたい」とやはり優等生的な答えが返ってきた。

中国が人工島建設を進める南シナ海問題では「埋め立てで何をしようとしているのか、（中国側から）深く聞きたい」などと述べたが、中国を刺激するような批判的な言葉遣いは慎重に避けていた。安倍晋三首相とうまがあつたアボット前首相時代と比べると、やや中立的な立ち位置ではないかとも感じた。

会場の記者たちの関心は日独仏3カ国が名乗りを上げている豪州の次世代潜水艦建造の共同開発国選定の行方にあつたようだが、まだ、決段階には遠いようだ。外相は「日本が戦略的な側面をアピールしていることは理解している」と指摘する一方で「評価プロセスの最中で、まだ時間がかかる」と言質を与えず、リップサービスはなかった。ただ、どんな質問もいやがらず、誠実に答えていたことは付け加えておきたい。

企画委員 毎日新聞社専門編集委員

坂東 賢治

ことしようきく 大関 琴奨菊

琴は「今に王になる字」 綱取りに意欲

写真・共同通信社提供

関取といえど下手が通り相場だが、大相撲初場所では日本出身力士として10年ぶりに賜杯を抱いた大関・琴奨菊は雄弁だった。打てば響くように答える頭の回転の速さと巧みな表現力。控室では温顔に隠されたし



たたかな勝負師の本音も吐露した。

まず「初場所での強さの理由」を問われると「世間が休むお正月に一番きつい稽古をして自信を持って土俵に上がったこと」と即答。その上で「15日間の戦いは気力が大事」として「奥さんの支えと、毎日同じルーティンを続けさせてくれた若い衆のおかげ」と語った。初優勝後のフイーバーについては「予想を超える反応に戸惑った」と言いながらも、「いまこそ大相撲を発信するチャンス」と受け止め、取材には積極的

に応じて自らをアピールしてきた。

初優勝に花を添えた妻の祐未さんについては「たくさん取り上げてくれるのはありがたいが、一般の人なのでこれからは私が壁になりたい」とほほ笑んだ。名門大学卒の帰国子女という祐未さんと結婚した直後の昨年7月場所では、大関陥落の大ピンチに立たされたが「本当につらい思いをさせた。今後は絶対に迷惑をかけないと誓った」と言う。

その時から始めた新たなトレーニング方法については「柔軟な球体のような身体をつくるため」とし、アコン型の巨体を利したがり寄りも「相手との接地面積の大きさが圧力につながる」と理詰めの分析。売り物の立ち合い時の上体を大きくそらせる仕草については、会場のロイター通信の外国人女性記者にアドバイスを求めて「琴バウアー」と命名する機知も見せた。

3月場所には三代目若乃花以来18年ぶりの日本出身横綱誕生への期待がかかるが、しこ名の「琴」について「今に王になるという字と先代親方(元横綱・琴桜)に教わった」と振り返り、「皆さんに勇氣と感動を与えられるように自分のためにも頑張る」と意欲をにじませた。

時事通信出身 泉 宏

ローレンス・トゥビアナ

仏気候変動交渉担当大使 COP21特別代表

パリ協定の発効は 2018年中と見通す

2020年以降の国際的な地球温暖化対策の枠組みに合意し「歴史的」と評価された昨年の国連気候変動枠組み条約第21回締約国会議(COP21)。議長を務めたフランスのファビウス前外相の特別代表として合意に大きく貢献した。



産業革命以来の気温上昇を2度未満にし、可能な限り1.5度に近づけることをめざして全ての国が排出削減に取り組むことなどで合意したパリ協定について、「会議前には誰もが予想もしなかったような野心的な合意ができた」と胸を張った。

気候変動研究の専門家として国際交渉などへの知見は豊富で、それを武器に14年の代表就任以来、各国を飛び回った。

パリで高まったモメンタムを維持し、成立したパリ協定の発効への道筋を付けることが次の大きな課題

で、中国と米国という2大排出国の動向がそれを左右する。

記者会見では、国際会議出席のために来日する前に北京を訪問して関係者と会談した、との最新のニュースを紹介。「中国は来年中に、早ければ今年中にも批准ができるのではないかと述べ、「米国では大統領選挙の結果が不透明だが、多くの企業が合意を支持しており、協定は18年中にも発効させられるのではないかと」との見通しを示した。

「09年のコペンハーゲンの締約国会議の失敗にもかかわらず、各国が積極姿勢を失わず、合意にこぎ着けた。温暖化対策の取り組みは着実に前に進んでいると確信している」と語った。

記者会見でもインタビューでも常に明確に答えてくれるのがトゥビアナ氏の持ち味だ。大幅な温室効果ガスの排出削減が進む中、日本では排出量が多い石炭火力発電所の建設が進む現状を問われ、「日本政府も大幅削減を約束したのだから、発電所の寿命が来る前に再生可能エネルギーでの置き換えを迫られることになるのではないかと警告することをお忘れなかった。

共同通信社編集委員 井田 徹治



上・チェルノブイリ原発の作業員の街、プリピャチの学校やホテルの内部=ウクライナ 下・スーパーには野生動物が跋扈した足跡がくっきりと残っていた=福島県富岡町 左・パルクードで分断されても、桜並木は季節を教えてくれる=富岡町夜ノ森(いずれも中筋純さん提供)

なかすじ

純

写真家

見えない放射能災害を可視化する

一瞬、きれいだな、と思わせる画像。何を撮ったのか戸惑う写真。一枚一枚の写真にストーリーがある。そして考え込ませる。

福島原発事故で立ち入り禁止となった町を歩き、シャツターを押し続けた。チェルノブイリにも通い、やはり無人となったアパートを歩き、記録した。

チェルノブイリの立ち入り禁止区域で16階建て団地の屋上から見ると紅葉が広がっていた。「奥に見える、ここが石棺です。自然にのみ込まれる難破船のようでした。こっちの写真は室内に木が育っている」。横長のパノラマ写真を説明した。

福島で対応するのは、シャツターが下ろされた商店を一軒一軒撮影し、横長につないだパノラマ写真だ。散乱した食品を動物が食い荒らした

スーパーの惨状も撮った。どれも人間が消え、真っ昼間なのに奇妙に静まり返っているのが、視覚でわかる。「人々の記憶、土地の歴史、人間のつながり。そういったものを核災害は強制終了させてしまう」とつとつとした語り口だが、写真に劣らずインパクトを持つことばを放つ。

「見えない放射能をどうすれば見えるようにできるか。可視化して肉体的感覚として放射能災害を体験する。身体の中に入ってきて記憶する。写真に語らせる、というか」

写真集「かさぶた 福島 [The Silent Views]」(東邦出版)を出版したばかり。アスファルトを割って育つ草。ガソリンスタンドを覆う緑。見事に咲いた桜に引かかるビニール片。「かさぶたが傷を癒やすように、植物が人間の作った構造物をのみ込んでいました」

5年たった無人の町で写真家のシャツター音だけが聞こえるだろう。日本記者クラブ専務理事 中井 良則

会見余話

当クラブでの琴奨菊関会見の翌日、スポーツ各紙には「琴バウアーに正式決定!」「土俵入りは不知火型」の大きな見出しが躍った。いずれもこの会見で初めて明らかにされたニュースだった。

この背景には、司会の原田正隆企画委員(西日本新聞、右ページ上写真)の周到な準備があった。

事務局では、同郷(福岡県)のよしみで原田さんに司会をお願いした。原田さんは、「エビ反り動作」の命名で「琴」か「菊」かの論争が続いているのを知り「本人の口で決着をつけさせる」と狙いを定めた。さらに横綱昇進時の土俵入りを、故郷ゆかりの雲竜型か、先代親方と同じ不知火型かの選択も標的にした。

2つの質問に琴奨菊関は最初、回答をかわしていたが、原田関、いや、原田さんが質問を繰り返す「ガブリ寄り」で攻め、とうとう答えを引き出した。ただ、琴奨菊関も嫌な顔もせず、最後は外国人女性記者を突然指名し「琴バウアー」を選ばせる究極の返し技を披露して、意外性ある充実した会見となった。

原田さんは運動専門記者ではないが、念入りの準備が相手からニュースを引き出すお手本のような司会だった。(事務局 土生)

岩手・宮城取材団 (2・17〜19)

●日本記者クラブの被災地取材団の日程は別名「弾丸ツアー」と呼ばれる。興味深い取材先が多く、分刻みの日程に追われるからだ。総勢21人の岩手・宮城取材団も、その名にふさわしい充実した内容だった。

初日は、大船渡市で再建した酔仙酒造の金野連社長の会見や蔵の見学などを終えて、大船渡プラザホテルに宿泊した。津波で3階まで浸水したホテルは土地のかさ上げのため高台に移転することが決まり、私たちが最後の団体客だった。近くに飲食店がなく、参加者の多くは取材も兼ねて徒歩十数分の屋台村に向かった。

おでん屋のおかみさんに聞くと、屋台村もかさ上げ対象地で、退去を迫られていた。年齢を考えると、新しい店舗の営業再開は難しいという。

2日目は、市街地が壊滅的な被害を受け、約1800人が犠牲になった陸前高田市で夕方まで取材した。市街地全域を十^トほどかさ上げする大規模な土木工事

まだ通過点に過ぎない



かさ上げ工事が進む陸前高田市の中心部。海側では防潮堤工事も続く。下和野災害公営住宅の屋上から撮影

が進む。住宅地を造成する高台をつくるために山を切り崩し、そこから出る大量の土砂をベルトコンベヤーで運ぶ。戸羽太市長によると、10トンのダンプカーだと8、9年かかる工事が1年半で終わったという。

寒風が吹きすさぶ盛り土の上で、建設会社や市の担当者に話を聞いた。



陸前高田から大船渡に新工場を移して再起した酔仙酒造。仕込み蔵の床下に発酵タンクがある

た。砂漠のような荒涼とした光景の先に、計画通り約2年後に商店街などが建っている姿を想像することは正直、難しかった。戸羽市長は「この5年間を検証してどのルールを変えれば、次の大災害が起きた時でも対応できるのかを考えてほしい」と語った。法の運用をめぐる注目を付けてきた市長の言葉は説得力があった。

児童7人が犠牲になり、両親を亡くした児童が10人。片親を亡くした児童が50人を超えた高田小学校の木下邦男校長の話は、涙なしでは聞けなかった。学校再開に当たって子どもたちをどう迎えるか苦悩したという。励ましや指導はせず、子どもたちに寄り添う方針で接することを決めたそうだ。「大人が夢を持つて前に進む姿を見せることが大切」と語っていた木下校長の話は、もっと時間をかけてうかがいたかった。

痛感したのは東北の津々浦々を襲った津波の被害の甚大さだ。被災者にとっては毎日が慰霊の日である。震災5年は単なる通過点に過ぎないことを肝に銘じたい。

企画委員 東京新聞社会部長

瀬口 晴義

■日程(2泊3日) 参加…9社21人

2月17日(水) 岩手県・水沢江刺駅集合、大船渡市へ▼三陸サイコー商店会・葛西祥也理事長など(昼食)▼酔仙酒造・金野連社長、工場見学▼三陸鉄道・熊谷松一運行部主任、南リアス線盛唐丹間乗車▼大船渡泊

2月18日(木) 岩手県陸前高田市▼下和野災害公営住宅・屋上から被災市街地全景見学。自治会長、住民の方など▼高田小学校・木下邦男校長▼陸前高田市役所・戸羽太市長会見▼陸前高田未来商店街「味と人情の鶴亀館」(昼食)、被災者で店主の阿部和明さん▼市消防防災センター・佐々木誠消防長、見学▼かさ上げ工事現場(新市街予定地)、被災したタピック45(道の駅)、復興まちづくり情報館、奇跡の一本松など見学▼普門寺・住職・熊谷光洋さん▼宮城県気仙沼市へ移動▼今川悟・気仙沼市議会議員▼気仙沼泊

2月19日(金)▼防潮堤工事見学(今川議員同行)▼気仙沼市役所・菅原茂市長会見▼製缶工場「ミヤカン」・寺田正志社長、工場見学▼気仙沼ニッティング・御手洗瑞子社長、編み手の方▼南三陸町へ移動▼南三陸町役場・佐藤仁町長会見▼被災した防災対策庁舎見学▼南三陸病院・総合ケアセンター・佐々木三郎事務長、院内見学▼戸倉小学校・手塚泰弘防災担当教諭、校内見学▼宮城県・くりこま高原駅解散

「ひとつ」が異なってゆく5年目

●3日目は、まず気仙沼市朝日町にできた防潮堤を見学した。

道路や再建した水産加工施設などが集積する場所、この防潮堤は直立型。「海が見えないと困る」との住民要望で、分厚いコンクリートブロックに一定間隔でアクリル製の窓(60×150センチメートル)が設けられた。それでも、直壁の圧迫感

は相当なものだ。同行する市会議員の今川悟さんからは、前夜にホテルで説明を受けた。地域紙の三陸新報記者出身とあってその内容は詳細で、月1回発行する「復興レポート」は被災地で取材を続ける各社の記者たちの貴重な参考資料になっている。

安倍首相夫人の活動を含め、東京からは巨大景観ばかり注目されがちだが、後背地のかさ上げや危険災害区域の設定とも絡み問題は複雑だ。「本当は今後の町づくりに生かすべきなのに、防潮堤のところで住民に対立構造が生まれてしまっている」と今川議員。

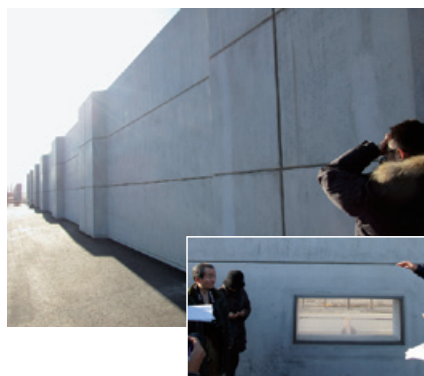
菅原茂気仙沼市長からも合意形成

に苦慮する姿はうかがえた。高台移転や災害公営住宅の数が分散しているのは、浜ごとの生業や集落を壊さないようにしたため。「そうしないと合意をとり付けられなかった」と再建の難しさを語る。この5年を振り返っても「いまだ解を見つけれないもの」として合意形成を挙げた。

南三陸町では、被災した旧防災対策庁舎を震災遺構として残すか否かをめぐって住民の意見が分かれた。周辺では工事が進み、巨大ピラミッドばりに成形された盛り土に囲まれて、骨組みになった建物以外に被災当時の面影を残すものはない。

町は昨年末、宮城県へと建物を引き渡した。県管理の下で、2031年まで結論を先送りした形だ。「周辺は公園として整備される。その後に必要かどうか議論すればいい」という佐藤仁町長の判断を責めることはできない。

危機時にはひとつになる気持ちも、平時へと移行するにつれ考え方や価値観は人ごとに異なる



気仙沼港に設置される防潮堤。海が見えるようにアクリル製の窓がついている

っていく。経営力や利益という共通目標が物を言う民間企業の再建に比べ、地域づくりには手間がかかり、それがさらに時間を引き延ばす。5年という歳月の過酷さがここにある。

朝日新聞社論説委員 高橋 万見子

参加者の声

●痛切な思い行間で伝えたい

津波で児童7人を亡くし、多くの子どもが親を失った高田小(陸前高田市)。木下邦男校長が、子どもたちとの接し方を語った際、嗚咽で話が途切れたことが印象に残った。被災者にとつて、身近な人を突然失った深い悲しみと戸惑いが続いていることを実感した。未来商店街で鶴亀

鮎(同)を営む阿部和明さんはユーモアを交えてお客をつなぎとめる苦労話をしてくれたが、資金難で店の再建が見えず、深刻だ。

震災5年を節目に特集記事で紙面がにぎわうはずだ。復興の課題を提示しつつ、痛切な思いを行間で伝えられないか、と考えている。

北海道新聞社 森川 純

●厳しい転換期を実感

被災地は石巻市へ行った2012年以来だが、大船渡市から南三陸町までの長い海岸線と移動時間を体感して初めて、津波の甚大さを知った。これもまだ一部と思うと気が遠くなる。仮設から本設になった商店会、かさ上げ工事の盛り土が続く地。工事の規模に比べて静かに見えた人の営みに被災地の厳しい転換期を実感した。

「震災後6年、7年も来てくれますか?」と尋ねた陸前高田市長の言葉が重く心にのしかかっている。東北を取り残していないか。遠く沖縄でも、復興が遅れる震災後の地域を思う想像力を持つておきたい。

琉球新報社 東江 亜季子



かさ上げの盛り土に囲まれた震災の記憶 南三陸町防災対策庁舎

福島・宮城取材団 (2: 24~25)

●東日本大震災から5年を前に今回訪れた福島県北部と宮城県南部は、これまでの取材団の「空白地域」だった。複数の取材先からは「震災後しばらくの間、報道から取り残されていた」という指摘も聞いた。

東京電力福島第一原発や、岩手県から宮城県北部のリアス式海岸を襲った津波被害に目は向きがちだ。だが今回の取材地域も原発事故で避難を強いられ、長い海岸線を津波が襲った。この取材団を組んだのは空白地帯を埋める理由からだ。

2日間の駆け足だったが、会った方々から共通して聞いたのは「自分で決める」という言葉だったと思う。

福島県飯館村から福島市に避難し、女性農業者のネットワークを復活させて餅や漬物、弁当など地元食材を生産・販売している「かーちゃん」の力・プロジェクト。会長の渡辺とみ子さんは「本当の復興は自律と自立」と話した。食材の放射線物質のチェックには独自の「安全基準」を決めた。厳しい基準は自らの手足を縛る。だが風評被害をはね返し、地元食材を広く発信する覚悟だ。

厳しい現実と自立の取り組み

つたという。

政府が4月中旬に避難指示解除の方

針を示しながら、住民の反対で最終決定に至っていない南相馬市の小高地区。「小高ワーカーズベース」の和田智行さんは「依存体質からの脱却」と語った。住民の姿がまばらな地区に戻り、人が集まる場をつくり、仮設スーパーを立ち上げ、食堂を再開した。「スモールビジネスを創出すれば、人が出入りし地域経済がよみがえる」と取り組み39歳の柔軟な発想には頭が下が

る思いだった。介護用マッスルスーツやドローンなどモノづくり支援の

企業、菊池製作所の飯館村の工場は震災直後の週末を休んだだけで月曜

日から操業を再開したという。「工場を動かしたいという思い」と担当者

は説明した。ただ、原発事故で避難している地域で

た、原発事故で避難している地域で



飯館村の方言「まてい」は真手(まて)からきている。両手で丁寧にお茶を出すときのように暮らすことが大事だと菅野典雄村長(左)



南相馬市小高区で、企業支援事業を進める和田智行さん。ゼロからの出発という地域だからこそ可能性は無限だ

川上 高志

企画委員 共同通信社説副委員長

はどこでも「若い人は戻ってこない」と聞かされた。「安心は心の問題。放射線への考え方は百人百様。どれもが正しい」と飯館村の菅野典雄村長は指摘する。「百点の答えはない。ベストではなくベターに向かつて進むしかない」

前向きに取り組む人たちも、明るい表情ながら苦闘の日々だと思っ

「住民には深い傷を負った人たちがいる。自立できる政策を国には求

たい」と村長は語った。

菅野村長が「震災後、仕事の2割はメディアとの闘いだった」と話したことも忘れてはならない。「東京・世田谷で飯館よりも高い濃度が検出された」という報道を例に挙げ「現象を報道するだけでいいのか」と問い掛ける指摘だった。



山元町臨時災害FM局「りんごラジオ」のスタジオ。来年3月までの放送延長が決まっている

■日程(1泊2日)参加: 11社18人
2月24日(水)福島駅集合▼福島市「かーちゃんの力・プロジェクト協議会」渡辺とみ子会長(福島民報本社)▼同会運営の「あぶくま茶屋」訪問▼飯館村仮役場・菅野典雄村長会見▼飯館村・高橋幸一・菊池製作所取締役、工場見学▼南相馬市小高区・和田智行「小高ワーカーズベース」社長の説明、案内で「仮設スーパー東町エンガワ商店」おだかのひろこさん見学▼大森プランツ・佐々木清志郎社長、バラ栽培見学▼相馬市泊
2月25日(木)南相馬市原町区「ベテランママの会」番場さち子代表、小鷹昌明南相馬市立総合病院医師▼南相馬ソーラー・アグリパーク・運営団体「あすびと福島」半谷榮寿代表理事▼相馬市役所・立谷秀清市長会見▼松川浦漁港見学▼宮城県山元町・山元いちご農園・岩佐隆社長▼山元町臨時災害FM放送局りんごラジオ・高橋厚局長▼仙台駅解散

被災地が直面する地域分断

●2日目は、福島県南相馬市や宮城県山元町で復興に向けた地域づくりに取り組む人々取材するとともに、福島県相馬市の立谷秀清市長から大震災当時の状況と今後の課題を聞いた。

行く先々で聞いた話は、どれも心に深く刻まれた。福島第一原発からの距離を示す地図を見ると、南相馬市を20^{キロ}と30^{キロ}の線が走る。避難指示区域を表示する地図だと、同市は取材時点では帰還困難区域、居住制限区域、避難指示解除準備区域、そして何もない地域の4つに色分けされる。

もちろん実際に色で塗り分けられているわけでもないし、何かの線が引かれているわけでもない。同市で若い母子と高齢者の支援をする「ベテランママの会」の番場さち子代表は「同じ市民なのに線引きされたことで補償があるかないとか、住民感情にしこりが生じてしまった」と語った。

最高16^{メートル}の津波被害を受けた山元町で、基幹産業のいちご栽培を法人化によって再開した山元いちご農園

の岩佐隆社長からは「同じ宮城県内、同じ山元町内の中でも風化が進行している。まだまだオール東北、オール宮城県、オール山元町で頑張らないといけないの」という話を聞いた。

地震、津波、原発事故、風評と幾重もの被害を受けた被災地は地域分断という事態にも直面しているという。被災地に地域分断を強いる一方で、被災地の外にいる私たちは、被災地との間に分厚い分断線を設けて安穩としている。5年前に掲げられた「オール日本」は、まやかしかつたのか。自省ばかりの取材となった。西日本新聞社論説委員 大西 直人



飯館村の菊池製作所工場は、住民が消えた避難区域にあるが工員が村外から通勤して操業を続けてきた。重労働支援のマッスルスーツ製造で大きな注目を浴び、取材団も試着した

参加者の声



福島第一原発から20キロ圏内の南相馬市小高区では、市街地での除染作業が依然、続いていた。作業は3月末に終了予定だが、避難区域解除の判断を待つ

●現場から学ぶ不屈の精神

「風化、風評と闘う」。被災地に足を置く新聞社として、編集方針は一貫している。一方で、冷暖房の効いた編集局に鎮座しているだけでは、復興の実相を肌で感じることができない。震災発生から間もなく5年。現場感覚をいくらかでも鍛え直そうと、取材団に加えてもらった。

福島県は筆者の初任地だった。懐かしい風景は今、見る影もない。ただ、今回出会った人々は前向きで、感傷主義とは無縁だった。「1000の課題から1000の仕事を生み出す」(小高ワークスベース・和田智行社長)。「不屈」も編集方針に刻もうと思う。河北新報社 鈴木 素雄

●街づくりへの息吹
避難指示が続く南相馬市の小高地

区に入った。和田智行さんは小高出身だ。東京で起業し仕事をしてきたが、現在は地元でワーキングスペーや食堂の経営に携わっている。どう街を活性化させるか。放射能被害で若者が戻らない中、街は急速に高齢化が進む。それは20年後の日本全体の姿だ。そこにビジネスを先取りするチャンスがあると見る。1000人を雇用する一つの事業体でなく、10人を雇用する1000の事業体があるべきだとの考えにもうなずける。前向きな姿勢に元気づけられた。毎日新聞社 伊藤 正志

●「狭き門」に挑む人々

聖書に「狭い門から入りなさい」とある。イエスの言葉だ。福島、宮城で出会ったのは、難しい「狭い門」に向かう方々ばかり。制限区域で起業する和田さん。子どもがいなかった地区で、中学生一人のために塾を続けた番場さん。「若者がいない」「働き手が少ない」。現地の方々は口々にそう言う。被災地の課題の根本は、少子高齢化という日本全体の問題だった。しかし彼らは行動し、一人の人生や、地域を確実に変えていた。「行いのない信仰は死んだもの」だが、小さな信念と行動は、希望を与えるカギなのかもしれない。

TBSテレビ 小林 拓馬

日本記者クラブ会報では、3月号に震災報道の特集を組んできました。今年は報道人としての道を歩み出す直前に震災が発生し、混乱のなか現場に飛び出した2011年4月入社の5年生記者6人に寄稿していただきました。

石巻市北部の北上川河口に位置する長面浦は、細い水路で太平洋とつながる内海だ。山々に囲まれ、穏やかな潟が広がる。東日本大震災まで、西岸の長面、東岸の尾崎の両集落に約700人が暮らし、「お金の他には何でもある」と自慢する豊かな地域だった。

津波で壊滅的な被害を受け、ともに災害危険区域になった。一帯のがれきは撤去され、更地や湿地が広がる。「昔の姿を知らなければ、誰もここに町があったとは分らない」。市外からの来訪者だけでなく、住民でさえも異口同音に語る。

震災から5年を迎えるに当たり、昨年春から集落に通った。約20キロ離れた内陸部の仮設住宅から通って漁業を続ける若者、地区を離れても祭りを守ろうと奮闘している住民たち、古里への思いを胸に移転地のまちづくりを考



上・震災直後の石巻市門脇＝2011年3月18日
下・現在＝2016年2月11日（河北新報社提供）

える人……。彼らの5年を記録にとどめようと連載を始めた。

両地区では115人が死亡、行方不明になった。遺族の取材は欠かせない。ある男性は両親と妻の3人の行方が今も分からない。当時は仕事で家を留守にしており、3人は自宅で犠牲になったとみられる。

「この5年、3人は一度も夢に現れない。なぜ逃げなかったと俺に怒られると思っているのだろうか」。男性はつぶやく。さみしさのあまり、霊媒師の元を訪れたこともあるという。「誰もあなたを責めていない」

と聞き、安心した。それでも、喪失感は埋められない。

遺族を取材するたび、いつも考える。どこまで聞き、どこまで書くべきか。不快な思いをさせていないか。正解はないと分かっているが、それでも悩む。記事になって反応があれば安心する。その繰り返しだ。

担当する石巻市の半島沿岸部には75の浜があり、全てが被災した。両地区に限らず、各浜に書くべき話があふれている。そのほかにも中心市街地のまちづくりや震災遺構保存の是非、仮設住宅からの自立と災害公

この「やましさ」がなくなる日まで

■河北新報社 高橋 公彦



営住宅移転後の支援、担い手の減少が続く農水産業の今後など、被災地の課題は山積みだ。震災というテーマ

の巨大さを前に、自分の力のなさに呻吟した5年間だった。

振り返れば、「東日本大震災」の文字のない記事を書いたことがどれほどあるだろう。入社後、すぐに津波で甚大な被害を受けた名取市の閑上地区に足を踏み入れ、戦場と見まがう破壊の跡に衝撃を受けた。遺体安置所で遺族を待ち、警察担当として行方不明者の捜索にも通った。

避難所でのコメント取りに始まり、被災者への取材は今も続く。時間の推移とともに仮設住宅を回り、災害公営住宅を訪ねる。「あなたに話してなんとかなるのか」と言われたことは数え切れない。

膝詰めで話を聞き、取材が一段落すると質問される。「記者さんは震災の時にどこにいたの」。いつも一瞬、答えに詰まる。当時は大学の卒業を控え、秋田市の自宅にいた。震災を経験していない。そう告げると、決まって「気にしなくていいのよ」と声を掛けてもらうが、申し訳なさでいっぱいになる。

心の中で思う。このやましさがなくなつた時こそ、被災地が復興した時なのだろうと。いつかその日が来るまで、書き続けたい。

（たかはし・きみひこ 石巻総局）

「あなたで良かった」を支えに

■岩手日報社 佐々木 理紗



に不安が押し寄せた。

道路が波打つ。付近の店舗から人が飛び出す。ガラスが割れる。思わず悲鳴を上げ、身を守った。入社を数週間後に控えた2011年3月11日、東日本大震災が発生した。内陸部の盛岡市で販売店研修の新聞拡張営業に回っていた私の目に飛び込んできたのは、車内のワンセグ放送に映し出される沿岸部の津波。どうしてもいいか分からず、ただ見つめるしかなかった。

「これからどうなるんだろう」。漠然とした不安を抱えながら4月に入社。警察担当としての勤務にも少しは慣れた5月、休日を利用して被災地の大槌町を初めて訪れた。

人の声がしない町に、がれきを片付ける重機の音だけが響く光景は今も忘れられない。被害の大きさを実感し、「これほどの震災と向き合い続けることができるだろうか」と一気



上・震災から2日後の大槌町中心部＝2011年3月13日、大槌町・城山公園 下・現在＝2016年2月15日（岩手日報社提供）

大切な人を亡くした遺族に「故人のお人柄を聞かせてください」と声を掛けるのは、とても勇気のいることだった。大きくくれば「被災地」の岩手でも、内陸と沿岸の被災状況は比べものにならない。内陸から来た私の言葉や態度が遺族の心の傷を深くしてしまうのでは、という恐怖は常にあった。

昨年末、震災から5年の報道に向けた被災者アンケートの取材に携わった。「忘れない」で出会った遺族のみなさんに現在の暮らしや心の状況を聞いた。回答から伝わってくる悲しさや悔しさ、将来への不安、復興が進まないもどかしさ。心の声が端々ににじんできた。どれだけ時間が過ぎてても、被災者の心はなかなか癒やされない。「あの日」で時間が止まった人は想像以上に多かった。

現状を目の当たりにし、被災地から離れた自分と恥じた。被災地から内陸に戻れば、私には被災者が失った「普通の生活」がある。だからこそ、遺族が話したいと思った時

はいつまでも聞こうと思う。心の傷に触れるのが怖い、つらい話題で申し訳ないと思っていたが、アンケートの回答には「震災を伝えていかなければならない」という思いが多く見られた。同じ県民として、発信手段を持つている者として、その役割の一端を担いたい。

現在は教育分野を担当している。まだ半年だが、震災が教育現場に与えた影響の大きさを感じている。「津波」の言葉を聞いただけで震えだしてしまう子や、つらさを表現できずに内に抱え込んでしまう子。内陸に転勤し、被災体験を語ることができなくなってしまう教員もいる。

一方で、震災をきっかけに命を救う仕事や地域を支える仕事を志した学生たちも少なくない。現場の葛藤や、痛みを抱えながらも未来へ向かう姿を伝えたい。

震災取材を通し、誰かの救いになるような記事を書くこと、誠実であることが目標になった。人の役に立ちたいとの思いが、私の記者としての原点だ。被災体験を聞かせてくれた人からの「この取材があなたで良かった。大切な宝物ができました」の一言が私を支え、きょうも背筋を伸ばしてくる。

（ささき・りさ 報道部教育担当）

東日本大震災発生時は新潟大卒業を前に関西地方を旅していた。乗っていた電車が一時停止し、車内が少し揺れた。気にも留めなかったが、神戸新聞の号外で大地震と大津波の発生を知った。福島県二本松市の家族へ電話し、互いの無事を確かめてほっとした。予定通り3月11日の夜行バスで大阪から新潟へ戻った。東京電力福島第一原発の水素爆発は学生寮のテレビで見た。

退寮日に実家から迎えに来た両親は、制限なく給油できるという当然のことを喜んだ。福島県内では物流が停止し、深刻な燃料不足だった。家に向かう車内でマスクを着け、暖房を消し閉め切った窓の外は、いつもと違って見えた。入社して自分に何ができるか見当もつかなかった。

4月1日に福島市の本社で入社式に臨んだ。最初の仕事は「ボランティア」で、高齢独居老人宅の片付けなどを手伝った。地震の揺れが話題になり、経験していない自分は震災を共有できていないと感じた。

震災から約半年後、社会部記者と

して宮城県に隣接する沿岸北部の新地町で取材した。津波の際にJR常磐線の踏切で遮断機が下りたままになり、踏切に従った町民が津波で犠牲になった、という情報が入り、町にできた約50戸の仮設住宅で被災当時の話を聞き取った。事情を説明すると協力してくれる人が多く、地元紙に寄せられる信頼を感じた。全戸を訪ねたが実際に犠牲になった人を知る住民はおらず、情報の真偽は分からなかった。

JR東日本は大地震時に踏切の遮断機が下りたままになる設定にしており、大津波は想定していなかったことが分かった。先輩記者の助言を得て紙面に載せ、危うさを指摘できた。現在、復旧作業中のJR常磐線は、踏切を立体交差に変える方向で整備が進められている。

入社2年目から沿岸南部に位置するいわき支社報道部所属となり、いわき市や双葉郡町村を取材した。市内には仮設住宅が33カ所あり、32カ所が原発事故で双葉郡から避難する住民に充てられた。アパートや親戚

入社時の気後れはもうない

福島民報社 菅野 聖



上・津波を受け大破した福島県いわき市岩間町の防波堤。道路付近まで流された＝2011年3月12日
下・復旧工事が進む同町の海岸線付近。今も壊れた防波堤が残る＝2016年2月4日（福島民報社提供）

宅などを含めて郡内から2万4000人が避難しているといわれていた。職人だったある男性は居場所を失い、体調を崩した。楽しそうに花を育てていた女性は古里の話題になると「自慢だった庭は荒れ果ててしまった」と涙を落とした。人口増加による市内の地価高騰や交通渋滞への不満、東京電力の賠償金が支払われる双葉郡の避難住民と支払われない市民との間の不公平感などから、肩身の狭い思いをする避難者もいた。

それでも、避難区域再編で自宅へ自由に行けるようになると取材に応じてくれる人が増えた。住み慣れたわが家に帰れない不安が、どれだけ心の負担になっていたかを痛感した。

2015年4月から本社報道部へ移り、県庁所在地の福島市政を担当している。市民の不安は原発事故由来の放射性物質だが、除染が進み徐々に解消されつつあるようだ。

一方、原発の廃炉は30年から40年かかると思われる。市内の避難者向け公営住宅では「古里に帰るのは諦めた」と話す人もいるが「元気な体で戻りたい」と運動を欠かさない高齢者もいる。

読者に寄り添い復興を見届ける責務が地元紙にはある。複合災害の現実を直視しようと取り組んだ5年間だった。自分にはもう入社時に感じた気後れはない。

（かんの・さとし 報道部記者）



上・押し寄せた津波で被災家屋のがれきが田んぼ一面を埋め尽くした。後方は新地発電所＝2011年3月12日、相馬市原釜 下・太陽光パネルで敷き詰められた現在＝2016年2月20日（福島民友新聞社提供）

たね」と陳腐な言葉しか吐けない自分が恥ずかしく、つらかった。私にとって入社からの5年は、被災住民が語る現実と自分のギャップをいかに埋めるかの作業だった。

震災後の南相馬市を初めて訪れた11年6月。津波にのまれて見渡す限りが荒廃した沿岸部に、ただただ息をのんだ。原発事故で住民が消え、ゴーストタウンとなった南相馬市の避難区域。立ち入りが自由化された12年4月時点では、津波で被災した車両が町中に転がっていた。南相馬市に隣接し、全域が避難区域となっていた浪江町の沿岸には13年4月、車だけでなく至る所に被災した漁船が横たわっていた。全ての光景が、取材相手の話を基に膨らませたイメージや紙面・テレビで見える「被災地」をはるかに超えていた。

今でも原発事故の避難区域や沿岸部を訪れるたびに、地元紙の記者として、実際に現地を見る大切さを痛感する。震災から5年が過ぎ、こうした土地が復旧していく様子を見るのは何よりうれしいし、地元紙の記者として伝え続ける意義を再確認できる。

一方、いまだに仮設住宅に身を寄せ、将来への不安を払拭できずにいる人が大勢いる。県土が再生する明るい側面だけでなく、時間がたつたからこそ被災住民が抱える悩みや課題をつぶさに報じることも自分の使命だ。未曾有の災害だからこそ、ささいな変化にも鋭敏に反応し続けたい。（たにぐち・りゅうじ 相馬支局長）

東日本大震災の年に入社し、2年目の2012（平成24）年から3年間、南相馬市を拠点に取材してきた。同市は福島県内で最多の636人が津波で犠牲になり、市の一部が東京電力福島第一原発事故に伴う避難区域に指定された場所だ。15年春の異動に伴い、現在は同市の北隣に位置する相馬市と新地町を担当している。

この5年間、沿岸市町村を中心に多くの方の涙、苦悩、怒りに触れた。その中でこそ光る笑顔もあった。5年の節目を迎え、被災住民の感情に色を付けず正しく発信し続けることが自分の職責だと再認識している。そのためには非日常が日常になった福島県で、「震災慣れ」していないかを自問自答する姿勢が何より大切だと感じる。

震災が起きた時、私は卒業を目前に控える東京の大学生だった。テレビで繰り返し見られる津波の映像に身震いし、福島市の実家に住む両親と連絡が取れたのは日付が変わってからだった。引越しの宅配便や福島へ帰る新幹線がストップし、大学の卒業式も中止になった。荷物を友人宅に預け、新年度の直前に再運行した夜行バスでなんとか福島へ戻ったことを覚えていて。大学生活の最終盤から一切の現実感がないまま、私の記者生活は始まった。

入社後1カ月の研修を終えて記者のスタートを切り、初任地の福島市で毎日、避難所の体育館を取材した。段ボールで仕切られただけの空間に数百人が過ぐす光景は今でも忘れられない。避難所で取材を始めてすぐに、「3・11」に自分が県外にいた人間で、震災の経験を県民と共有していないという壁にぶつかった。県内でも地域によって被災の度合いは違うが、震災当日の混乱や空気を知らない私にとって、避難所で取材相手と交わす言葉の一つ一つに、現実味が湧かなかつた。原発事故で古里を追われた人、津波で自宅が全壊した人、家族を亡くした人。壮絶な体験を聞いた後で、「大変でしたね」と陳腐な言葉しか吐けない自分が恥ずかしく、つらかった。私にとって入社からの5年は、被災住民が語る現実と自分のギャップをいかに埋めるかの作業だった。

「未経験の壁」現場取材で超えたい

福島民友新聞社 谷口 隆治



初めて聞けたた
ましい電子音だっ
た。その音源らしい
携帯電話は隣の部屋
に置いたはずだ。そ
の瞬間、立っていられない激しい揺
れに襲われた。

福島中央テレビへの採用が内定
し、4月からの配属先に決まった制
作部に、3月14日からアルバイトと
して出社することになっていた。そ
の日、本社のある郡山市に引越し、
まだ荷物を降ろし終えないまま一休
みしていた。電子音が緊急地震速報
だと気づいたのは震度6弱の揺れの
中だった。

中にいたら危ない！揺れが続く
中、必死に外へ出て、辺りを見回す
と、コンクリート塀が崩れ、泣く子
どもたち、それを抱きかかえてなだ
める大人、晴れていたはずなのに突
然の雪が降り始めた。にわかには信
じられない非日常の光景。何かすさ
まじいことが起きていることだけは
分かった。しかし、この時の不安は
まだ漠然とでしかなかった。

翌日の東京電力福島第一原発の水
素爆発は、これから入社するテレビ
局が捉えた映像で知った。福島に帰
ってきたはいいが、この先どうなる
のか、不安は募るばかりだった。

ちらりとのぞく「非日常」を忘れない

■福島中央テレビ 佐藤 昭徳



福島中央テレビの監視カメラが捉えた第一原発
1号機の水素爆発＝2011年3月12日（同社提供）

結局、私が会社に行ったのは3月
20日頃で、正直に言えば、会社の方
が安全かもしれないと思ったから
だ。後日、先輩から「新人は本当に
来るだろうかと心配していた」と言
われたが、先輩たちも新入社員未満
の私に構う余裕はなく、最初に命じ
られたのは貯蔵物資や救援物資の整
理だが、実際は物資の隣に立ってい
るだけだった。

数日後、ようやく仕事らしきこと
をした。CMを差し替えた例の「A
C」の代わりに、福島の祭りや自然
などのVTRを送出した。続いて、



「L字画面」の
情報更新をし
た。L字画面は、
避難所や給水、
交通機関の情

報、生活必需品を扱う店の再開情報
などを画面に流すもので、上司と情
報をチェックした。テレビ局の非日
常の中で、私の日常がスタートした
わけだが、日々慣れていく自分に少
し驚いたことも覚えている。

4月、新入社員となった私の仕事
はフロアディレクターの見習いだっ
た。初めて生中継の現場に行ったの
は、春の福島を代表する観光地、福
島市の花見山だったが、観光客はま
ばらだった。福島市出身の私には、
同じ花見山とは思えなかった。「観
光客にインタビューしたいから連れ
てきて」という指示に、首から下げ
たストップウォッチと線量計をカチ
カチぶつけながら走り回った。三春
町の滝桜でも同じだった。

5月10日、川内村で初めて警戒区
域への一時帰宅が行われ、立ち入り
拠点の体育館からの中継でフロアデ
ィレクターを務めた。住民たちの目
は、期待の一方で、不安に満ちてい
た。私自身が警戒区域に入ったわけ
ではなかったが、2カ月前と同じ感
覚にとらわれた。

あれから5年がたった。福島でも、
原発周辺の避難指示区域を除けば、
多くの人が日常を取り戻している。

3年目の国連科学委員会やWHOな
どの報告は、迷いながら福島にとど
まった人たちにとって力づけられる
ニュースだった。除染や自然減衰に
よって放射線量が徐々に下がる中
で、前向きに復興をめざしている。
10万人近くが県の内外で避難生活
を続け、原発構内の困難さや子供たち
の甲状腺がんをめぐる分かりにくさ
を抱えながらも、それは変わらない。

しかし、福島の外からは今なお5
年前のままであるように見られてい
るようだ。190万人が暮らす福島
が困難を抱えながら復興に向かうに
は、ありのままの姿を見てもらうこ
とが欠かせない。

私は今、夕方の情報ワイド番組の
ディレクターを務めていて、自分の
担当する番組の中で原発事故を取り
上げることはまずない。隣のニュー
スセンターでは原発関連のニュース
を放送しない日はないが、あの非日
常の空気が流れることはない。とは
いえ、今でもちらりとのぞく非日常
に注意しながら福島の日常の姿、そ
して美しい福島、楽しい福島を伝え
ていきたいと思っている。

（さとう あきのり 制作部ディレクター）

報道カメラマンとしての原体験

共同通信社 中島 悠



「中島、確か2011年入社だったよな?」。サッカー五輪予選の取材をしていた私は、ドーハでその電話を受けた。「3・11から5年 5年生記者は今」という内容で原稿依頼が来たという内容だった。もうあれから5年がたつ。少しは成長できただろうかという思いとともに、入社した頃の不安な気持ちがよみがえった。

入社を控えた2011年3月11日、私は当時住んでいた東京・池袋の駅東口で震災に遭った。建物から避難した人たちが池袋東口五差路が埋め尽くされた異様な光景を、今でも覚えている。走って家に戻りテレ



ビをつけると、津波が太平洋岸に迫るあの映像が中継されていた。

内定は一時凍結されるのではないかと考えたが、予定通り4月1日に私は共同通信の記者となった。以前広告会社で働いていた私は、人生2度目の入社式に臨んだ。さあこれから新たな気持ちで、と思う間もなく新人研修を早々に離脱させられ、すぐに配属となった。カメラマンは皆取材に出払い、写真部は閑散としていた。「とんでもない日に配属されたな」。たまに出入りする先輩たちは口々に言った。

その日は4月11日で、震災から1カ月の節目の日だった。「撮影と送信のやり方だけとにかく覚えろ」と言われ、カメラとパソコンを渡され、配属翌日から一人で取材に出た。必死でやっているつもりだったが、わけが分からないまま取材しているので、デスクに怒られる毎日が続いた。情けない気持ちでいっぱいだったが、しかし細かく指導してもらった時間がないのも分かるので、注意されたこと一つ一つをなめるほど、そういうも

のかと理解しながら少しずつ身につけていくしかなかった。震災取材とともに始まった不安な日々だったが、毎日4〜5件の取材をして体で覚えていく経験は今思えば貴重だった。

初めて自分でネタを見つけて記事を書いたのも震災取材の時だった。11年の年末、岩手で取材していた私は仮設住宅の掲示板にあった「楽器の修理します」という貼り紙を頼りに店を訪ね、修理職人の取材をした(写真＝筆者提供)。修理道具を津波で失ったが、がれきから見つけた楽器を「どうにか直してほしい」と学生が持ち込んできたのをきっかけに、修理の再開を決意したという。

それまでは撮影をするだけで人の話を聞く取材はしただけで人が、必死で話をメモ帳に書きとめた。写真がなかなか決まらず悩みながら撮影したが、「私も音楽をやっている。そういうこだわり、分かるよ」と言って協力してくれた。

後日、読者から反響があり、学生たちの練習場所や防音素材の提供を申し出る連絡があったと電話で聞いた。取材はとても緊張したし、店の扉を開けるかどうか直前まで迷ったが、勇気を持って撮影をお願いしてよかったと思えた。カメラマンの多くが経験していることだと思うが、

私にとって取材の結果を実感したのはこれが初めてだった。話を聞いて記事を書き、写真を撮るという当たり前の取材、小さな出来事だが、当時の私にはとても印象的だった。

今、私は福岡支社にいます。昨秋、新年原稿の企画取材をする機会を得て、長崎・熊本・鹿児島のキリスト教関連遺産を取材した。自分で取材計画を立て、自由に動かしてもらった。初めてドローンでの空撮も行った。事件・事故やスポーツとはやはり異なる、とても貴重な経験だった。

私はこの企画取材の中で何度も岩手でのことを思い出した。交渉や申請が難航しても、嫌な顔をされても、「取材する意味がある」「取材させてください」と真摯に言えたのは、震災取材でのカメラマンとしての原体験がいつも少しずつ背中を押してくれていたからだ。その体験はこれまでもそうだし、これからも私にとって大きな財産であり続けるだろう。

何を取材するにしても、そこに必ず人がいること、それぞれにストーリーがあること、そして勇気を持って取材することを忘れずにチャッターを切るような心がけていきたい。5年を振り返った「5年後」の今、あらためて思う。

(なかじま・ゆう 福岡支社写真映像部)

岩手県・北上支局赴任中に東日本大震災に遭い、被災現場を駆け回り、その後、大槌町の広報担当を経験した先輩がいます。ベテラン記者の「あの時、そして今」を特別寄稿していただきました。

た。皆さん、家族も、財産も奪われながら、相手を思いやる優

震災時、岩手県北上支局でシニアライターとして8年目を迎えていた。朝日新聞の記者になって以来、体験したことのない災害だった。記者生活40年を過ぎていた私も、6人の新人記者の方々と同じように、不安や恐れを抱きながら被災現場に入った。

それまでの記者生活は、震災取材のための助走期間ではなかっただろうか。ここで全力を尽くさなければ、それまでの記者生活が無為に帰してしまうのではないか。そう自らを鼓舞せざるを得なかった。

壊滅的な打撃を受けた大槌町おつちまちょうを取材現場に選んだ。大槌町は津波で中心市街地が消滅した。人口の約1割の住民が犠牲になり、当時の町長を含め大勢の町役場職員が亡くなった。内陸部の北上市から車で片道2時間の大槌町通いが始まった。

●寝食を共にしながら取材

旧安渡小学校あんりどの避難所に泊まり込み、被災者の方々と寝食を共にしながら話を聴いた。48カ所に点在する仮設住宅を回りながら悩みを聴い

しさを失わず、いたわり合い、肩を寄せ合いながら過酷な現実には耐えていた。支援のために現地を訪れていたボランティアは次のように話した。「支えているようで、実は私たちが支えられている。多くのことを学ばせてもらっている」

震災取材で2年が経過し、朝日新聞を退社する時期が近づいてきた時、大槌町の当時の碓川かみがわ町長から、思いもよらない誘いを受けた。「退社後、町の復旧、復興を手伝ってほしい。町の情報発信力を強化したい」。第三者として震災を報道する立場から、震災復興に直接、関わる立場へ。それまでは望んでも、かなわないことだった。

大槌町では広報広報の強化が急務だった。被災者の方々に将来への希望を持ていただき、共に前進するためには、復興情報を共有することが欠かせなかった。さらに全国からの支援者に復興への歩みを知らせる義務があった。月2回の広報紙をリニューアルした。月1回の

記者から町役場職員に転身し復興支援

■但木 汎(朝日新聞出身)

定例記者会見や、月数回の町長と仮設住宅の住民が懇談する「お茶っこの会」を設営した。町の公式フェイスブックに毎日のように出稿した。情報は包み隠さずに開示した。

記者から役場の広報担当になり、立場の逆転に戸惑うばかりだった。大槌町では、復興の遅れに加え、旧役場庁舎の保存や防潮堤の高さの問題をめぐる町民の意見が分かれていた。記者会見の場は行政と記者団との真剣勝負の場だった。町長は、住民を代表して切り込んでくる記者のどんな質問にも答えなければならなかった。事前の打ち合わせに時間を割き、有事の際の行政のしんどさを肌で感じた。

●風化させずに語り継ごう

現在、大槌町役場の「生きた証プロジェクト」に関わり、時折、大槌町を訪ねている。震災で犠牲になった町民1285人のご遺族全員を対象に、亡くなった方々の経歴、お人柄、亡くなった時の状況を聴き取り、記録集をまとめる事業だ。犠牲者を追悼するとともに、被災時の状況から教訓をくみ取り、後世に伝えることが目的で、聴き取り調査の一員に加わっている。



当時の碓川豊大槌町長(右)と筆者(2013年8月、大槌町内の旧安渡小学校体育館/筆者提供)

母親が3人の子どもたちを保育園、小学校に迎えに行き、避難途中に津波に襲われ、一緒に亡くなった。消防団員が停電で使えなくなったサイレンの代わりに半鐘を持ち出し、打ち鳴らしたまま息絶えた……。ご遺族一人ひとりの証言は、一瞬の判断が生と死を分けた当時の状況を物語っている。

三陸沿岸は「津波常襲地帯」である。近代以降に限っても、明治三陸津波、昭和三陸津波、チリ地震津波に襲われている。今回の「平成三陸津波」を風化させずに後世に語り継いでいくこそが、取材に関わったわれわれに課せられた責務なのだ。5年の節目に、あらためて、そんな思いにとらわれながら、ご遺族の方々からの聴き取りを続けている。(たつき・ひろし 元朝日新聞政治家部)

47
記者ゼミ



問い続けたい 個別政策と 全体評価とのズレ

自民党が政権復帰を果たした2012年衆院選と翌年の参院選。東京新聞は自民党圧勝を伝える本記とともに「脱原発の民意と隔たり」「世論と議席にズレ」といった見出しの評論や分析を掲載した。選挙は本来、民意集約の場のはずだ。事前の世論調査では、原発再稼働や9条改憲への反対意見が過半数だった。にもかかわらず、再稼働、改憲を掲げる自民党が多数の議席を確保した。その矛盾を押さえておきたかったからだ。

紙面では、脱原発や護憲を掲げる政党が乱立して票が分散したことを主な原因に挙げた。ただ、そうした表層的な分析だけで事足りるのか。当時の疑問に、今回のゼミは明確な思考回路を与えてくれた。

杉田教授は、安倍政権の現状について、個別政策と全体評価にズレがあることをまず説明した。安保法への根強い反対に対し、内閣支持率は

下がっていない。過去の本紙の報道と同様だ。その上で、立憲主義をはじめ平和・平等主義を軽んじる政治は劣化の道をたどっているとした。

背景分析が興味深い。経済危機、環境汚染、難民問題などが国境を越えて拡散する現代。一国の政治はそれらに無力だ。一方、市民は生活に直結する給与と雇用に最も関心があり、何とかしてくれそうな政治を相対的に選ぶ。しかし、特に複雑化する経済問題には簡単に対処できず、政権交代しても結果は同じ。代表制民主主義の機能低下が目立つ。

光明が見えにくい政治をめぐる報道の在り方は、私たちに突きつけられた課題だ。経済が有権者の大事だとしても、政治に他の全てを白紙委任するわけにはいかない。社会・安全保障、エネルギーなどの将来テーマを問い続けることが今以上に重要と感じる。各社が異なる社論をぶつけ合うことが社会の中立を担保する、との教授の意見も貴重だった。

東京新聞編集委員 白鳥 龍也

1・25(月)「政治報道の想像力」/司会…橋場義之特別企画委員/出席…参加12人+ネット視聴4人

48
記者ゼミ



実証主義、反証主義 事実をつかむ 取材理論を紹介

事実を伝えるのがジャーナリズムだが、事実をつかむことは難しい。ジャーナリストの武田徹さんが、そのための実証主義と反証主義について語った。

まず、取材の基本手段であるインタビューの特徴や

限界について説明した。経験聞けば、その人の実経験をつかめると考える「素朴な取材観」では、話者の思い違いを排除できない。

そこで、聞き取った話を資料と付き合わせたり、発言に矛盾点や唐突な言い方がないかを見定め、再取材によって聞き取った情報を評価・検証する「実証主義的インタビュー」が必要になる。

だが限界もある。語り手の内面の心象までを解釈し、解釈の妥当性を確かめるために別の人にもインタビューをして、解釈を修正して精度を高めていく「解釈的客観主義的インタビュー」も考えられる。

さらに「対話的構築主義のインタ

ビュー」という取材者と語り手、同席した人との関係を考慮する方法も紹介した。たとえば、会話には話す

順番のルールがある。話している人には、話を続け、次に話す人を指名する権利がある。しかし実際の会話では、割り込みや、指名された人が沈黙することもある。ここに話し手の力関係があり、内容を変容させている可能性があるという。

武田さんは次に「事後検証」をテーマにした。仮説にこだわらず、それを否定する「反証」を探すこと、全てでは修正し得ると考える「可謬主義」をとって徐々に改良していくことが大切なのだと言った。

報道現場では、当初の見立てにこだわらぬあまり、見立てに沿った材料ばかりを集め、否定的な材料を過小評価して事実をゆがめる失敗が目につく。武田さんは「可謬主義」が好きな言葉だという。方針転換をいとわないことの重要性を肝に銘じ、気を引き締めて取材に当たりたい。

毎日新聞社会部 青島 顕

2・5(金)「実証の報道・報道の検証」/司会…橋場義之特別企画委員/出席…参加18人+ネット視聴8人

マイナス金利導入

早田 栄介(共同通信社)

政策転換の衝撃 情報発信の在り方に疑問

日銀の金融政策決定会合が終わると、日銀内の一室に詰めていた担当記者たちには政策方針を示した発表文が配られる。金融政策が現状維持の場合、A4の紙で一枚。1月29日に配られた資料は3部だった。何らかの政策変更があることは分かっていたが、題名に「マイナス金利」とあるのに気づいたとき、心底驚いた。慌てる心を落ち着かせ、資料を読み込んだ。それと同時に沸き上がってきたのは、「こんな政策変更があつていいのか」との思いだった。

**議論は十分だったのか
理解促す意識も薄い**

日銀は、かねてマイナス金利に否定的な態度をとってきた。黒田東彦総裁は昨年10月の記者会見で、マイナス金利は「検討していない。近い将来、考えが変わる可能性もない」と言い切った。1月21日の参院決算委員会でも「具体的に考えていない」と答弁していた。

一部の市場関係者や報道の中には、総裁はサブプライズ効果を演出するため、あえて正反対の情報発信をしているとの見方もある。そこまでの狙いが本当にあるのか分からない。ただ、政策の進め方や経済情勢の変化について、分かりやすく情報発信し多くの人に理解してもらおうとする意識が薄いと感じる。それは市場やメディアに対してだけでなく、日銀内の関係者にもあてはまる。事後取材を通じ、マイナス金利決定までの経緯がある程度分かっていた。総裁が追加緩和の選択肢を検討するように事務方へ指示したのが1月21日夜。そしてダボス会議へ出発し、帰国後の25日にマイナス金利の方針を内々に固めた。それ以前から総裁の頭の中には選択肢としてあったのかもしれないが、日銀内でマイナス金利が本格的に検討されたことはなく、多くの関係者にとって寝耳に水の政策変更だったようだ。

日銀内の事前取材でも、マイナス

金利については「現状の金融緩和策との相性が悪い」「まだ国債の買い入れを拡大できる」など、従来通り否定的な見解がほとんどだった。

決定会合での賛否は前回の追加緩和と同様、賛成5人、反対4人に割れた。「反対があつてもぶれない」。そう言えば聞こえはいいが、反論を踏まえて問題点を検証し、議論を尽くした上での決定だったのか疑問に思う。内部で検討に着手してから決定会合の初日までに4日。決定会合で金融政策を議論する2日目が終わったのは午後0時半すぎだった。前回の追加緩和や量的質的緩和を決めた際の終了時刻が午後1時半を回っていたのに比べると明らかに短い。

**市場は混乱
メディアも疑心暗鬼に**

総裁がマイナス金利を決断した背景には、追加緩和をする際の「拡張性」を重視したことがある。この政策は、金利のマイナス幅を掘り下げることによって緩和効果を高めることが可能だ。2月3日の講演では、その点が強調されていた。国債購入を柱とした量的緩和を続けていけば、いざれ国債は底をつく。持続性への疑問が強まれば、金融政策に対する期待がしぼんでしまうと考えたようだ。

だが、これまでの説明とは異なる政策転換の衝撃と、長期金利のマイナス化という異常事態の発生により、消費や投資を促すという日銀の狙いよりも副作用の方が注目され、市場の混乱や人々の不安を強める結果を招いている。

現状のような情報発信が続けば、どこまで総裁の言葉を信じていいのか、市場だけでなくメディアも疑心暗鬼になる。政策の意図が市場や企業、消費者にうまく伝わらなければ効果は発揮されないし、国民の信頼がなければ日銀の手足を縛りかねない。今後、日銀の情報発信の在り方が問題になるのではないかと懸念している。

もう一つ気になるのは、将来発生するコストの問題だ。日銀は既に340兆円を超える国債を保有しており、金融緩和の出口に向かう局面で巨額の負担が生じる。長期金利がマイナス圏に沈む中、日銀が国債購入を続けるには、より高値で買う必要がある。日銀は金融緩和策の効果を主張するが、それに伴うコストの情報も明らかにされなければ、政策が妥当なのかどうか判断できない。

はやた・えいすけ▼2004年入社
12年経済部 14年から日銀担当

北朝鮮 ミサイル発射

山本 志門(テレビ朝日)

9〃重視の心理見抜き 空飛ぶ物体鮮明キャッチ

「あつ、来た！」
カメラマンの声が静寂を打ち破った。

陽が昇り始めたばかりの中朝国境—遠くに光る米粒ほどの飛翔体を肉眼で確認。すぐにマイクを握った。

「今、北朝鮮国内の方から何か光る物体を確認しています。飛翔体でしょうか。垂直に高度をぐんぐん上げています。カメラは北朝鮮のミサイル発射基地・東倉里^{トシヤンリ}の方向を向いています。おそらく、北朝鮮が発射したミサイルと思われます」

必死に実況を続けた1分半だった。北朝鮮が「人工衛星」と称する事実上のミサイル発射。撮影に至るまでは、常に北朝鮮に振り回された。

当初の発射予告期間は、2月8日から25日。その最初の1週間は、ちょうど中国の旧正月・春節休み。最もスタッフを動かしにくいこの時期に、北京・丹東^{ダントウ}2カ所での中継体制の維持は、一番頭を悩ませた。さらに、発射前日の6日夕方のこ

とだった。「野党幹部によると、発射期間が1日前倒しとの未確認情報」政府筋も同様の話。矢継ぎ早に入ってくる報告に焦った。明朝6時半までに中朝国境に入れるだろうか。「航空券を調べて！」便はありません「別の空港は？」。支局で緊張が高まった。「空路が無理なら、今から支局車で飛ばして10時間以上。ギリギリの到着、間に合うか」

悩み始めたその直後、「瀋陽^{シニョウ}に2時間半後の便」との声が上がった。「すぐ買って！ 現地での車両の確保も」。バタバタで車に飛び乗った。

「米粒」追うための場所選定 カメラ設置に腐心

現地時間夜10時。瀋陽空港に到着したわれわれクルーは、大量の撮影機材とともに車に乗り込んだ。そこから陸路3時間以上、日付を超えた午前2時頃、ようやく現場に到着した。発射予告時間まで5時間。刻々と時間が迫る中、徹夜でセッティン

グした。

撮影準備は、3年前のミサイル発射時にさかのぼる。前特派員が当時の状況を分析した報告書を基に、われわれは事前に中朝国境の町・丹東に入り、リサーチを開始。東倉里にできるだけ近く、最も視界が開けている場所の選定、その上で発射方向を精緻に確定した。一方で、米粒ほどのミサイルの軌跡を見逃してしまう不安も付きまとった。そのリスクを減らすため、カメラの複数設置などをはじめ、技術的な工夫も重ねた。

全世界に配信 映像の強さ再認識

2016年2月7日、現地朝6時半。北朝鮮の通告時間がやってきた。



「ミサイル発射」を速報するテレビ朝日画面(テレビ朝日提供)

大空に目を凝らす時間が続く。30分、そして1時間がたった。強い眠気も襲ってくる。

その時、スタッフがつぶやいた。「韓国メディアが予告期間内で、気象条件が一番良いのは、北朝鮮時間の朝8時半から9時半の間」と報道」その一言で想像力が湧いてきた。

金正恩第1書記は、命令書にサインし、その様子を積極的に公開してきた経緯がある。ならば切りの良い時間になるのではないか。さらに、北朝鮮は9〃という数字を重視するとの情報も頭をよぎった。「であれば、発射時間は、北朝鮮時間の9時！ 日本時間9時半だ！」。こうした推測も、ピンポイントでの集中力を高めることにつながった。

そして、日本時間午前9時31分。飛翔体を確認。カメラマンがズームインしたことで、鮮明なミサイル飛翔の撮影に成功した。

この映像は、結果的に貴重なものとなった。全世界に配信されたという連絡も受け、予想以上の反響に驚いた。何にもまして、テレビマンとして「映像が持つ強さ」を再認識した取材だった。

やまもと・しもん▼1998年入社 政治部 報道ステーションディレクターなどを経て 2014年から中国総局長

私が会った
あの人

ポジティブに捉える目

本田技研工業の創業者 本田宗一郎さん

岡田 実（北海道新聞出身）

私は北海道新聞に41年間在籍し、その半分近くを東京で過ごした。主に経済を担当したが、地方紙の記者が東京で働くことに意味と楽しさを見いだすきっかけを作ってくれたのが、本田技研工業の創業者・本田宗一郎さんである。数多く会った経済人の中でも、ひととき強烈な印象を私に残してくれた。

東京に赴任して1年目の1985年3月、日本商工会議所が主催する訪中団に同行した。団長は東急グループ総帥だった五島昇・日商会議所。中国の最高実力者だった鄧小平氏が進める改革開放政策が始まってほぼ6年がたった時期で、全国の商工会議所や大手商社のトップなど100人余りが参加した。その中に本田技研工業の最高顧問で、東京商工会議所副会頭だった本田さんもいた。

私は当時、日商（東商）と兜町の記者クラブを任されていた。兜クラブには日本経済新聞の記者が53人も配置されているのに、当方は一人で2クラブ掛け持ち。自社の弱小ぶりに打ちひしがれている時だった。

ところが訪中団の同行記者は13社13人。一人でどこまで勝負できるかを試す良い機会が巡ってきた。中国語ができない私に何ができるか、と考えた末、団員の部屋を「夜回り」することにした。真っ先に頭に浮かんだのが、「経営の神様」として知られる本田さんだった。

部屋のドアをノックすると、本田さんが笑顔で迎えてくれた。話の途中、中国で働くホンダのスタッフがやってきた。当時、ホンダは重慶にあるオートバイ工場に技術供与していた。開放政策の実態を聞こうと本田さんが呼んだもので、私が退席しようとする、「このまま一緒に聞

いている」と言ってくれた。この中で、開放政策が進むにつれ、沿海部と内陸との格差が拡大している、ニーズに合わない製品を大量に作り、野積みしているケースもあるなど、さまざまな問題点を知ることができた。

訪中団は、鄧氏をはじめ中国政府要人と次々に会談し、上海近郊の宝山製鉄所、広州近郊の農村地帯、深圳市内の三洋電機工場などを見学した。

この間、本田さんの部屋をたびたび訪れた。本田さんは「会社は本田家のものではない。世襲はダメだ」「若い社員と話をすることが大好きだ。彼らはわれわれが気づかない発想や知恵を出してくれる」と、楽し



日本人として初めてアメリカの自動車殿堂入りし、記者会見する本田宗一郎氏（1989年12月25日／時事通信社提供）

そうに語ってくれた。

団員と記者団が懇談した際、改革開放への懸念や対中投資慎重論が相次いだ。だが、本田さんは「最初に中国を訪れてから10年以上たつが、近代化が急速に進んでいることに驚いている。効率の悪いものを惜しげもなく捨て、効率的なものをどんどん吸収していく姿に期待したい」と、大声で言った。

問題点を十分に知りながら、それでもポジティブに物事を見る。町工場を大会社に育て上げた優れた経営者としての本田さんの一面を垣間見る思いがした。

私は「夜回り」のおかげで、中国要人の話や見学したことを立体的に見ることができ、記者として自信を持てた。担当が変わり、91年に本田さんが亡くなるまでおいでできなかったが、訪中後もずうずうしく邪魔していれば、私欲がなく底抜けに明るい本田さんからもっともとと学べたのに――と悔やんでいる。

（おかだみのる 前北海道新聞社専務）

次号は佐野慎輔さん（産経新聞社）にバトンが渡ります。

寄 贈 書

■なぜ私は韓国に勝てたか 朴槿恵政権との

500日戦争（加藤達也・産経新聞前ソウル支局長）

韓国の朴槿恵大統領の名譽をコラムで傷つけたとして在宅起訴され、昨年12月に無罪が確定した産経新聞の加藤達也前ソウル支局長がまとめた初の手記である。



産経新聞出版
1512円

現在は社会部編集委員として拉致問題や警察庁を担当しており、そもそも警視庁で公安・警備部門や拉致問題を追っていたタフな「事件記者」だ。とはいえ、今回の8カ月にわたった出国禁止措置など約1年半に及んだ裁判は、相当な心労だったと思う。

本書は、前代未聞の在宅起訴から劇的な無罪判決に至るまでの一連の経緯に加え、取調室での検事との生々しいやり取りや、緊迫した法廷内の様子が詳述される。朴政権が「産経に謝罪させる」ことを刑事訴追の目的にしていたとみられることや、大統領周辺の困惑と国民感情で法が恣意的にねじ曲げられていく様子を「情治主義」という韓国特有の言葉で迫るなど、内容は衝撃的だ。

三笠 博志（産経新聞東京本社社会部長）

■報道写真集 軌跡 大津波からの5年

2011年3月11日、岩手県沿岸部を襲った大津波は5千人を超す人々の命を奪った。いまだ124人の行方は分からぬまま。岩手県警は現在

も月1回、不明者搜索を続けている。

本写真集は、震災直後から岩手日報の記者が被災地で撮影した写真を基に、震災から5年の軌跡をたどっている。歩み、恵み、絆、祈りの4テーマに沿って、震災直後からの被災地の変わりゆくさまを切り取った。



岩手日報社
1620円

紙面連載した記者ルポ「被災地を歩く」も掲載。震災後から被災地に入ったルポの第5弾で、同じ場所を訪れた記者たちの主観が盛り込まれている。

明日の暮らしも見えず途方に暮れた人々に、年を追うごとに笑顔がのぞく。一方、5年を重ね、さらに悲しみに沈む人、いまだ家族が見つからず、心の整理ができない人もいる。はや5年、まだ5年――。復興は道半ばだ。

八重樫卓也（岩手日報社報道部第二部長）

■増補 実践的新聞ジャーナリズム入門（猪股征一著）

2006年刊行『実践的

新聞ジャーナリズム入門』



信濃毎日新聞社
1512円

の増補版だ。信濃毎日新聞社編集局長も務めた猪股征一氏（現監査役）が、特定秘密保護法や安全保障関連法の成立もあったこの10年間を見つめ直し、提起する。「平和と民主主義の危機の前に、メディアがなすべきことは多い」と。

「ジャーナリズムの創造」を加えた。現実社会への関わりが薄くなって、短絡的な思考がまん延しかねないインターネット時代の課題を指摘。新

聞は東日本大震災を機に、人々に情報を伝え、生活に寄り添う報道が再評価されたとし、国民からの信頼が「新聞の命」と訴える。

権力側のメディアへの介入、記者クラブ制度の問題点などに向ける目は厳しい。「今の取材や報道が政治や権力による戦略に埋め込まれていないかどうか、日常から見直すことが必要」。新聞をめざす若者も記者自身も胸に刻むべき戒めだ。

小市 昭夫（信濃毎日新聞社報道部長）

マイBOOK マイPR

■地方創生まちづくり大事典―地方の未来、日本の未来―

竹本 昌史（日本経済新聞出身）

珠玉のまちづくり193選 全国各地で繰り広げられている最新の地域再生事業を総点検し、特筆すべき活動を選んで193の事例に集大成したものが本書である。衰退する地域をよみがえらせ、生き生きとしたまちづくり、キラリと輝くむらづくりに挑戦する現場を身近に体感できる「珠玉のまちづくり193選」といえる。

北海道から九州まで全ての市町村を10年かけて訪れ、各地で取り組まれている地域活性化事業の最前線に足を運んだ。地域の特性を生かしたユニークで多彩な活動があちこちで展開されており、本書を読めば、これから地方創生事業に取り組む人々にとって多くのヒントが得られる。



国書刊行会
12960円

情報発信

クラブ施設では会員による各種の会合が行われています。企業や大使館などの賛助会員も記者発表の場としてクラブを利用しています。

■第20回「女性の活躍舞台づくり」委員会

主催：(一社)日本MOT振興協会

内閣府男女共同参画局推進課課長補佐(積極措置担当)の木山悠氏が「女性活躍推進の国際比較と今後の日本～女性の活躍推進に関する現状と施策～」をテーマに話した。講演後、質疑応答と意見交換が行われた。(2.3 アラスカ)

■公開シンポジウム「個人情報保護法改正と報道の自由—国民の知る権利は脅かされるのか」主催：日本新聞協会

個人情報保護法の施行後、情報提供者に過度な萎縮や情報隠しが広がっている。改正法でさらなる匿名化が懸念されるとして、取材現場の変化や報道機関が果たす役割について記者や研究者らが議論した。

パネル討議には奥山俊宏・朝日新聞社編集委員、青島顕・毎日新聞社社会部記者、奥村信幸・武蔵大社会学部教授、山本和徳・個人情報保護委員会参事官が登壇した。コーディネーターは穴戸常寿・東大大学院教授。出席者は110人。(2.10 10階ホール)

■第13回企業フィランソロピー大賞贈呈式

主催：(公社)日本フィランソロピー協会

同賞は2003年に創設後、社会課題の解決や社会の健全な発展に寄与する活動を行う企業・プロジェクトを毎年顕彰している。

大賞に(株)リクルートホールディングス、フィランソロピー賞に味の素グループ、四季(株)、(株)スタイリングライフ・ホールディングス、(株)特殊衣料が選ばれた。(2.16 10階ホール)

■読売テクノ・フォーラム研究交流会

同交流会は産・官・学の連携も視野に、フォーラム会員同士の「学びと親睦の場」として毎月1回開催している。2月は山口大の玉田耕治教授が「がん治療を変える新たな免疫療法」と題して講演した。(2.19 会見場)

■会議報告

●第370回会報委員会(2・8 大会議室)

3月号の編集を協議したほか、4月号掲載予定の「チェルノブイリ原発事故から30年」特集についても検討した。

出席 飯塚委員長、稲沢、高橋、鈴木、渡辺、向山、吉澤、大寺、長崎、藤井、藤澤の各委員。

●第460回企画委員会(2・10 10階Bホール)

新委員の播摩卓士・TBSテレビ報道局編集主幹(旧・杉尾秀哉氏)のあいさつの後、5月の総会記念講演会の講師候補を検討した。今後のゲスト選定についても協議した。

出席 西村委員長、星、安井、倉重、坂東、脇、実、水野、別府、宮田、榊原、川上、軽部、山本、

■伊勢志摩サミット公認サポーター任命式

G7伊勢志摩サミット(5月)の公認サポーターとして、三重県名張市出身のシンガー・ソングライター、平井堅さんが任命され会見した。三重県の鈴木英敬知事らが出席した。(2.19 会見場)

■セント・パトリックス・デー 2016イベント発表会見 主催：駐日アイルランド大使館

アイルランドのナショナルデー「セント・パトリックス・デー(3月17日)」を記念して、3月に日本各地で開催されるイベントの発表会見が行われた。アン・バリントン駐日アイルラン



ド大使(写真中央、大使館提供)ほか、関係者が出席した。関連イベントには同国のシンボルカラーであるグリーンを身に付けて参加するのが慣例となっている。(2.24 会見場)

■放送人政治懇話会

テレビ・ラジオ局の現役・OBらによる勉強会。2月は小沢鋭仁・改革結集の会会長(2.3)、安住淳・民主党国対委員長代理(2.10)、仙石由人・元官房長官(2.17)、大島理森・衆院議長(2.24)をゲストに招いた。

■民間「立憲」臨調 声明発表会見

安保法制に反対する有識者でつくる通称・民間「立憲」臨調が、野党共闘などを求める声明を発表。小林節・慶大名誉教授らが出席した。(2.25 大会議室)

■「私たちは怒っている」

キャスター有志緊急記者会見

高市早苗総務相の「電波停止」発言に対し、憲



法および放送法の精神に反するものであると抗議する会見が開かれた。冒頭、鳥越俊太郎氏(右端)が声明を読み上げた後、キャスターらが発言した。左から青木理、大谷昭宏、金平茂紀、岸井成格、田原総一郎、鳥越の各氏。(2.29 10階ホール)

瀬口、原田、宇留間、島田、播摩、堀、ワグナー、梶本、橋場の各委員。

●第462回会員資格委員会(2・17 小会議室)

3月1日付入会を審議し、理事会に答申した。出席 小田委員長、花谷、齋藤、越中、小池、播摩、山本、國府の各委員。

●第221回施設運営委員会(2・26 小会議室)

事務局が行ったラウンジ利用状況調査をもとに、夜の営業時間を30分短縮し21時30分までとすることを決め、理事会に上申した。

出席 西淵委員長、野村、竹内、須賀、須田、佐塚、富田、羽原の各委員。

レストラン*価格は全て税込みです

予約電話 和食 3503-2723 洋食 3503-2766・2731

和食 春懐石(4/28まで)

先付：ピース豆腐、姫さざえ磯煮ほか お椀：潮仕立て 造り：三点盛り 焼物：鰯素焼き 煮物：若竹煮 揚げ物：白魚桜葉揚げ 食事：鯛飯 水菓子：季節の果物 グラス冷酒付き(5,400円)
(板長：大井由光)

洋食 桜鯛のポワレコース(4/30まで)

コールドビーフサラダ、ハマグリチャウダー、スープ、桜鯛のポワレとカッペリーニ、バルサミコと香草のソース、桜アイスクリーム、パン、コーヒー付き(3,780円)。ランチ、ディナー(土曜日はランチのみ9階レストラン)ともにご利用いただけます。
(シェフ：黒須修一)

歓送迎会プランをご利用ください 4/30まで

歓送迎会の季節です。お仲間との集まりにお使いください。昨年より一部リニューアルしたメニュー(下記)を、お一人3,240円で提供します(別途、部屋代がかかります)。1,404円をプラスして2時間の飲み放題にすることもできます。ご予約は03-3503-2724まで。

アボカドと鮭のマヨ和え/桜鯛のカルパッチョ/桜海老と菜の花のカッペリーニ/グリーンサラダ/アスパラガス入りオムレツ/鰯の味噌チーズ焼き/鶏もも肉のカツレツ/新キャベツと豚肉の回鍋肉/お寿司/日本そば

<訃報>

小島宣夫会員(産経新聞出身、87歳)が2月4日、清宮龍会員(時事通信出身、87歳)が同6日、西田善夫会員(NHK出身、80歳)が同27日死去されました。謹んでご冥福をお祈りいたします。

HP更新情報 <http://www.jnpc.or.jp/>

■会見詳録 会見の全文文字記録版

●シリーズ企画「戦後70年 語る・問う」④「『戦後入門』をめぐる一戦後70年目の戦後論」加藤典洋・文芸評論家(2015.12.9)

●シリーズ企画「戦後70年 語る・問う」④「保守は大東亜戦争を肯定できるのか」中島岳志・北海道大学准教授(2015.12.15)

●2016年経済見通し「転機を迎えたアベノミクス」早川英男・富士通総研・経済研究所エグゼクティブ・フェロー(1.13)

■音声アーカイブ(日付は会見日)重要会見の音声録音

●ブトロス・ガリ・国連事務総長(1993.2.18)

*「音声アーカイブ」へは、クラブウェブサイトのトップページからアクセスできます。

クラブの電話 ダイヤルイン

●和食レストラン(9階).....☎3503-2723 ●会員事務.....☎3503-2727
●洋食レストラン(10階).....☎3503-2766 ●経 理.....☎3503-2728
●貸室予約、宴会打ち合わせ.....☎3503-2724 ●クラブ行事への申し込み.....☎3503-2722
●受 付.....☎3503-2721 ●会見申し込みアドレス...kaiken@jnpc.or.jp

会員現況

●法人会員：134社 ●基本会員：744人 ●個人会員：1,338人
●法人・個人賛助会員：65社・143人 ●特別賛助会員：100人
●名誉・功労会員：12人 ●学生会員：162人 計：199社・2,499人

第105回 日本記者クラブゴルフ会のお知らせ

春のゴルフ会を下記の要領で開催します。初参加も大歓迎です。お問い合わせ、お申し込みは事務局の河野(3503-2764)まで。

《日 時》4月15日(金)午前9時10分集合

《コース》藤沢ゴルフクラブ(神奈川県綾瀬市)

《スタート》10時03分 IN スタート 4組

《競 技》18ホール ストロークプレー(ハンディキャップ制)

《会 費》5,000円

ご意見をお寄せください 会報委員会から

ご存じのとおり、クラブ会報は今年1月号から「ゲスト一覧」と「会見リポート」のページを新設しました。会見した全員を写真付きでコンパクトに紹介した「ゲスト一覧」と、そのうち、重要ゲストや関心の高いテーマを選んで紙面で取り上げた「会見リポート」の2本柱で掲載しています。取材した記者が会見内容をまとめた原稿は全て、速報を重視して、原則、会見翌々日にウェブサイトへアップしています。

新設ページについて、会員の皆さまの声を寄せください。会報委員会では、時代の流れに合わせた会報とウェブサイトの在り方を検討しています。さまざまなご意見、ご感想をいただきながら、よりよい会報づくりを進めていきたいと考えています。ご協力をお願いいたします。

会報担当・長谷川 電話：03-3503-2752

メール：hasegawa@jnpc.or.jp

3月の行事予定(3/3現在)

15㊤	14:00～15:30 9階会見場 記者会見 アリ・ビーザー・米国映像作家
17㊤	13:30～15:00 9階会見場 胡鞍鋼・清華大学国情研究センター長
18㊤	15:00～16:30 10階ホール 研究会「変わるアメリカ 変わらないアメリカ 大統領選」③ 上英明氏
22㊤	17:30～18:30 10階ホール シリーズ企画「3.11から5年」④ 田中俊一・原子力規制委員会委員長
24㊤	14:00～15:00 9階会見場 シリーズ企画「国連と日本人」⑤ 小野舞純・国連事務総長室・シニア・オフィサー
25㊤	13:00～14:00 10階ホール シリーズ企画「3.11から5年」⑤ 宮野廣・日本原子力学会廃炉検討委員会委員長
	14:30～15:30 10階ホール 記者会見 村井嘉浩・宮城県知事
30㊤	14:00～15:15 10階ホール シリーズ企画「チェンジ・メーカーズに聞く」③ 吉田浩一郎・クラウドワークス社長

会報委員会

委員長＝飯塚 浩彦

委 員＝稲沢 裕子 大寺 廣幸 鈴木 仁
高橋 茂 長崎 和夫 藤井 良広
藤澤 秀敏 向山 明生 吉澤 正一
渡辺 大祐

(事務局：長谷川和子 村田 茜)

☎03-3503-2752 FAX 03-3503-7271

撮影…早坂 洋祐
はやさか ようすけ
 (産経新聞東京本社写真報道局)



神宮外苑の路上から見えたダイヤモンド富士。珍しい都心の風景を見ようと大勢の人が詰め掛けた

〓 2月4日、東京都新宿区

五輪前夜の高揚感

1972年春。ミュンヘンオリンピック直前のスタジアム建設工事現場を訪ねた。これからオリンピックだ、という高揚感が町中にあつて、工事を見守る警備員もはしやぎ気味だった。「始まったら、ぜひ見に来いよ」。男はそう言つて、外套の内ポケットから小さな酒瓶を取り出してチビリとやり、それをすばやく仕舞い込んだ。春とはいえ小雪が舞うほどの寒さだった。

2004年夏。アテネオリンピックが始まる直前で、観光客で賑わっているのに店を閉めた商店が多い。「今日は休日だから」と言いつつ、自分が外に出て楽しんでいようだった。

オリンピックの歴史をたどると、どの大会にも思いがけない事件がまわりついている。あのミュンヘンも、凄惨なテロに襲われたし、第1回のアテネ大会では開催に反対していた首相が亡命する騒ぎだった。

国立競技場が解体されて、神宮外苑からダイヤモンド富士が見えるという。そこに多くの人たちが集まった。遠く望む富士とせん光、もうゴタゴタは勘弁してほしいという祈りにも似た高揚感を感じる。もともと富士山は信仰の山だ。あらゆる不祥事をオリンピックからなくしてほしいという多くの人たちの祈りは、果たして届いたのだろうか。

(後藤 文生)